

平成20年度北海道医療大学FD合宿研修報告書

# 大学教育における コミュニケーション

北海道医療大学FD委員会

平成20年度北海道医療大学FD合宿研修

# 大学教育におけるコミュニケーション

期 日 平成20年9月13日（土）－14日（日）  
場 所 定山溪ビューホテル

主 催 北海道医療大学・FD委員会

ディレクター  
阿部 和厚

タスクフォース

井出 訓	及川 恒之	国永 史朗	倉橋 昌司
中澤 太	長谷川 聡	花淵 馨也	横山 登志子

## 目 次

---

はじめに	1
趣旨など	2
参加者名簿	3
進行予定	4
ワークショップのプロダクト	
グループ名簿	12
Aグループ（「愛（A i）」）	13
Bグループ（「BB p h o n e」）	16
Cグループ（「C&C」）	18
Dグループ（「デンジャラス」）	21
Eグループ（「Eだろう」）	23
WS 5：意見交換	26
参加者感想	29
タスクフォース感想	32
アンケート集計	
プレアンケート集計	38
ポストアンケート集計	48
資料	59
アルバム	70

## 人間力を大学力へ

FD委員長 阿部和厚

コミュニケーションをテーマとした平成 20 年度FD合宿研修が無事に終了しました。本学には、魅力的な人物、有能な人物、たよりになる人物が多い。このFDで、このような素晴らしい人々に出会えたことは、大きなよこびでした。FDを盛り立ててくださった参加者の一人ひとりに感謝いたします。

最近、改正された大学設置基準、大学院設置基準では、FDは大学の義務となっています。FDは大学の使命である教育の質の向上、教育の改善に対する大学としての組織的取り組みです。FDを実施し、教育改善に有効に機能させていくことは、大学として必須の条件となっています。いいかえますと、FDを実施し、教育改善の努力をしていることを説明できないでは、一人前の大学として認められません。

本学のFD合宿研修は、全学的な教育で使える授業のカリキュラム設計を柱として、今年で、7年目です。3年間は、大学の教育の基本構造を学ぶこと、特にシラバスの目標表現や成績評価について知ることを中心とし、学生中心の授業の本質、各教員の大学における立場を知ることが、FDの大きなインパクトとしていました。これは、大学教員全員が認識し、理解し、使えるようになる必須の内容ですが、タスクフォースを務めるFD委員、リピーターからは、繰り返すうちにマンネリとか、現実味のあるテーマ、改革に生かせるFDがほしいとなったのは、当然でした。そのため、4回前からは、大学がかえる教育の課題を柱に、教育の基本を知るという内容としました。たとえば、国家試験の合格率へ結びつく「落ちこぼれのない教育」、「IT活用・視聴覚教育」、「導入教育」、そして本年は「コミュニケーション教育」です。それでもFDの方法を変えていったらという声もきこえます。

大学の生き残りは、持続的教育改善にかかっています。松田一郎学長は、今年のFDでも、「最も強いものが生き残るのではなく、最も賢いものが生き延びるのでもない。唯一生き延びるのは、変化できるものである」とダーウインのことばを引用しました。FDは、教員の意識改革、そして行動の変化を求めます。そして、学長は、今回のテーマのコミュニケーションと関連して、スタッフの自覚、相互の理解・尊敬・協力からなるチーム医療の重要性、教育に関わる学内情報の共有、生命倫理、患者中心の医療、インフォームドコンセントなどについて熱く語っていただきました。

今回のFDで特色的であったことは、コミュニケーションの専門家として、長谷川 聡さん（福祉）にFDのワークショップ導入をさせていただいたこと、また、井上 訓さん（看護）、横山登志子さん（福祉）など新FD委員による司会・進行、そしてこれも新FD委員である中澤 太さん（歯）の仕切りでコミュニケーションに関する授業設計のテーマを参加者の意見で決めたこと、夕食後のワークショップを行わず、夕食、短い休憩のあとにつづいて、懇談会、そして翌日は、朝1時間以上の準備をして、各グループ30分模擬授業、10分質疑応答のワークショップとしたことでした。そのため、前日夜の懇談会は、超真面目の模擬授業設計ワークショップとなり、それぞれのグループが集まってものづくり作業でした。これは、私が全国の数十大学でFDをおこなってきた経験で、初めてみる姿でした。

これらの模擬授業は、各グループの教員それぞれがタレントぶりを発揮し、これぞ受けてみたい授業をみせていただきました。今回のFDのハイライトでした。

さて、FDは上から押し付けるものではなく、ボトムアップ的に行われるべきであるという意見もよく聞きます。しかし、FDが義務となっている今日、もはやボトムアップ的FDはありえません。FD委員には、本学として実効性のあるFDを実施していく責務があります。ボトムアップ的発想、全教員の思いを的確にモニターし、目標を建設的な行動へむける形とし、FDの内容を具体化し、実施の細部が設計されなければなりません。大学を良くしていくのは、人であり、具体です。そして、行動に移す情熱にささえられた一歩前進です。みなさんの素晴らしい人間力を大学力へしていただけますように、期待しています。

松田学長は、最後にエマーソンのことばでまとめられました。

「情熱なくして成し遂げられた偉業はこれまで一つもない」

## 趣旨など

---

平成20年度FD合宿研修

メインテーマ：大学教育におけるコミュニケーション

主催：北海道医療大学（FD委員会）

期日：9月13日（土）・14日（日）：1泊2日

場所：定山溪ビューホテル 011-598-3223

プロデューサー：松田 一郎

ディレクター：阿部 和厚

タスクフォース：グループチューター：長谷川 聡、国永史朗、花淵馨也、中澤 太  
井出 訓、横山登志子、倉橋昌司、及川恒之

タイムマネージャー：国永史朗、花淵馨也、阿部 和厚

事務：嵯峨由紀美、日下稔規、河村陽子

### 趣旨

コミュニケーション・スキルは、医療・福祉・心理系の職業人養成教育では、必須のコアとなっています。患者－医療者関係、医療技術者間での情報共有、インフォームドコンセント、チーム医療など、あらゆる業務は、双方向コミュニケーションで成り立ちます。この研修では、コミュニケーションに関する教育について検討します。また、大学運営とも関係して、学生－教員、教員－父兄、教員－教員、教員－事務員などのコミュニケーションについても概観しながら、大学教育におけるコミュニケーションについて考えます。

### 作業目標

- 1) 医療系大学のコミュニケーション教育の位置づけを知る。
- 2) 大学教育におけるコミュニケーションをめぐる課題を知る。
- 3) コミュニケーション教育の授業を設計する。の目標を知る：導入教育の要素を整理し、学習目標を具体化する。
- 4) コミュニケーション教育の方法を知る。
- 5) 大学におけるコミュニケーションの課題を知る。

### 研修形態

- 1) 体験型研修とする。
- 2) ミニレクチャー、グループ作業、討論を繰り返す。
- 3) 小グループ学習方式の研修とする。
- 4) 普段着で肩書きなしの対等な意見交換をする。
- 5) 建設的意見交換から、建設的教育改善方策を生み出す。

## 平成20年度北海道医療大学FD合宿研修参加者名簿

\*氏名：職名順/ア行順/敬称略

所属(学部・学科等)	職名	氏名	専門領域等	備考	
薬学部	7名	教授	高橋 大	人間基礎科学	
		准教授	秋澤 宏行	生命物理科学(放射薬品化学)	
		准教授	高上馬 希重	創薬科学(生薬学)	
		助教	小田 雅子	薬剤学(薬剤学)	
		助教	河野 奨	生命物理科学(薬品物理化学)	
		助教	布目 佳奈	分子生命化学(生化学)	
		助教	野田 久美子	実務薬学教育研究	
歯学部	12名	教授	柴田 俊一	口腔構造・機能発育学系(組織学)	
		教授	中澤 太	口腔生物学系(微生物学)	FD委員
		准教授	國分 正廣	生体機能・病態学系(歯科麻酔科学)	
		講師	田中 真樹	口腔機能修復・再建学系(咬合再建補綴学)	
		講師	橋本 正則	口腔機能修復・再建学系(生体材料工学)	
		講師	水谷 博幸	口腔構造・機能発育学系(保健衛生学)	
		講師	森田 貴雄	口腔生物学系(薬理学)	
		助教	伊藤 泰城	口腔機能修復・再建学系(歯周歯内治療学)	
		助教	上地 潤	口腔構造・機能発育学系(矯正歯科学)	
		助教	尾立 達治	口腔機能修復・再建学系(う蝕制御治療学)	
		助教	倉重 圭史	口腔構造・機能発育学系(小児歯科学)	
助教	西村 学子	生体機能・病態学系(臨床口腔病理学)			
看護福祉学部	8名				
看護学科		教授	井出 訓	老年看護学	FD委員
		准教授	桑原 ゆみ	地域看護学	
		助教	吉野 賀寿美	実践基礎看護学	
臨床福祉学科		教授	向谷地 生良	医療福祉臨床学	
		准教授	志水 幸	医療福祉臨床学	
		准教授	長谷川 聡	医療福祉政策学	
		准教授	横山 登志子	医療福祉政策学	FD委員
		助教	伊藤 新一郎	医療福祉政策学	
心理科学部	8名				
臨床心理学科		教授	貞方 一也	物性物理学・数値計算・プログラミング言語	
		准教授	漆原 宏次	学習心理学・実験心理学	
		准教授	河合 祐子	臨床心理学・カウンセリング	
		助教	宮崎 友香	臨床心理学・認知行動療法	
言語聴覚療法学科		教授	及川 恒之	分子細胞生物学・再生医学	FD委員
		教授	小野 滋男	哲学・倫理学	
		教授	西澤 典子	耳鼻咽喉科学, 聴覚言語障害学	
		教授	森若 文雄	神経内科学	
歯科衛生士専門学校	2名	専任教員	大山 静江		
			岡橋 智恵		
大学教育開発センター	4名	センター長	阿部 和厚	解剖学・組織学・高等教育学	FD委員長/心理科学部教授
		実施部長	倉橋 昌司	生命基礎科学	看護福祉学部教授
		教授	国永 史朗	人間基礎科学	
		准教授	花淵 馨也	人間基礎科学	
計	41名				

### 【世話役】

プロデューサー	学長	松田 一郎
ディレクター		阿部 和厚
タスクフォース		井出 訓 及川 恒之 国永 史朗 倉橋 昌司
		中澤 太 長谷川 聡 花淵 馨也 横山 登志子
事務	学務部教務課	大学教育開発センター担当課長 嗟峨 由紀美
	学務部教務課	日下 稔規
	学務部教務課	河村 陽子

【備考】研修参加者：32名(ディレクター、タスクフォース等を除く)

## 進行予定

---

### 9月13日(土)

8:20 あいの里キャンパス 必要機材積み込み (OHP、スクリーン、液晶プロジェクターなど  
マニュアル、クリップボードなど)  
(担当:事務)

あいの里乗車教員 (座席表)

8:30 あいの里キャンパス バス出発

8:50 札幌駅北口集合 (座席表、マニュアル、バス乗車・グループの参加者確認)

バス:花渚 マイクチェック (自己紹介)

グループ参加者 チェック の指示

グループのFD委員チェック

FD委員もまざれこんでいますのでよろしく。

9:00 札幌駅北口 バス出発

司会/花渚 あらためまして おはようございます。

大学教育開発センターの花渚

昨年から FDはセンターの仕事として義務出席

これから2日間 FD合宿 正しくは FD缶詰合宿 よろしく

テーマはコミュニケーション

コミュニケーションの始まり、相手を知る

1分以内 自己紹介 自分は何者か、この2日への抱負 軽口で

1分間40分以上 ですので1分弱で

声を聞かせて

FDのディレクター役 阿部さん

阿部:大学教育開発センター長 メディカルカフェでは、ゲストの先生もさんづけ

FDでは、教授も助教も対等ということさんづけ

コミュニケーションよろしくお願いします。

国永:

すわっている順に・

花渚:もうすぐつきます。マニュアルの ホテルの図

2階の玄関に到着、研修会場は<新館2F 大会議室『コスモ』>

つきましたら、玄関先で 記念写真

そして荷物をもって研修室へ

10:00 定山溪 ビューホテル到着

<記念写真撮影後、荷物をもって研修室《大会議室コスモ》へ>

司会/国永

国永:開会に先立ち オリエンテーション

スケジュール

学長のお話、阿部さん FD なぜコミュニケーション

長谷川さんから コミュニケーション

午後からワークショップWS 1、2、3、4、

グループで作業してプロダクトをだす。ここでは使えるプロダクトをつくりま

す。また、プロダクトは、報告書にまとめ、のちに活用

WS 2が終わると4時 休憩——部屋へ荷物

ワークショップ4は6時

ここでは 翌日の作業のオリエンテーション

お風呂へ

7:00から 夕食 例年ですと 夕食はノンアルコールで夕食後も作業をしてい

ましたが、今年は 夕食の内容が1時間では忙しいので、きちんととり、食後の休憩を挟んで懇談会となります。

明日は、WS 3で設計した科目のある授業にてついて

WS 4でコミュニケーションに関する模擬授業

それからおしまい意見交換

午後3:00終了です。

このFDはWS型FDです：学生参加型授業のモデル

与えられた時間で作業し、発表をくりかえします。

作業時間が短い、時間が足りないという意見もききますが、

そのために作業が順にすすめられるのでよいとも聞きます。

スケジュールに従って順調にすすむようご協力お願いします。

実りあるFDとなりますことを

それでは、FDをはじめさせていただきます。

FDは、大学のリーダーである学長のもとに実施されます大学による組織的取組です。

10:20 開会：学長講話 20分

司会/国永

10:45 ミニ講義1 20分：「医療系教育のコア・コミュニケーション教育」阿部和厚

司会/国永

資料 コアカリから コミュニケーション

医師—患者関係

インフォームドコンセント

チーム医療

学科の 医療コミュニケーション シラバス

コミュニケーションの種類

傾聴

課題

11:05 **ミニ講義2** 30分「身体で覚えるコミュニケーション・スキル」長谷川 聡  
25分トーク 5分質疑

司会/井出：臨床福祉の専門職はコミュニケーションの専門家を育てているといわれています。実は、本学のどの学科でもコミュニケーションでなりたてますが、コミュニケーションを専門としています長谷川さんにお話をうかがいます。

コミュニケーション 要素

長谷川：トーク

司会/井出：レクチャーがつづきましたので、すこし解きほぐします。

長谷川さんにおまかせします。

11:35 **コミュニケーション準備体操** 説明 長谷川 5分 体操 演技20分  
(アイスブレイキングいくつか)

できたら、ABCDEのグループ名(各ABCDEを頭文字に)

タイムマネージャー 昼食案内 次の集まる時間のアナウンス

12:00 昼食 <新館1F グランシャリオ>

12:50 **WS1 コミュニケーションをめぐる課題** 70分

司会説明/横山：コミュニケーションをめぐる課題をだし、3分で発表、2分で質疑をします。コミュニケーションが問題といっても、何が問題？

視点は、つぎの5つです。(各グループにふる=順でよい)

問題点をあげる 解決法は考えなくてよい。

OHPシートにいくつかまとめる キーワード

関連性 図式化

説明 5分 次の5の視点を班にふりあてる。

WS2ではコミュニケーションに関する授業・教育設計するので、それも意識する。

KJ法は 班ごとに配属されたタスクフォース、あるいは他がリード

KJ法は はじめて合う人 相互のコミュニケーション開始に有効ですので・・・

グループ役割分担 作業毎にとりかえる

リーダー 仕切り役(課題の把握、作業ゴールの理解、全員の意見をひろう時間をみでの作業リード)

レポーター 発表者

レコーダー 記録者2名

1：グループ作業の進行に必要なノート(提出しない)

2：(提出資料を作成)

(提出物は班代表がまとめ、期日までの事務へ)

資料作成 適宜

各グループにコンピュータ1台用意しています。コンピュータがあると、提出資料がWS中にできると言う利点がありますが、パワーポイントをつかうことがおおく、文章説明による報告書としては不完全になる傾向がありま

す。また、だれかに作業集中し、WSでの役割をまわすという原則に支障がでます。  
 これもできるだけ、役割をまわすようお願いします。  
 OHPは共同作業促進にはメリットがあります。

- 12:55 作業 40分 (KJ法) (KJ法については、グループ内の誰かが教えながら)
- ① 学生生活 学生—学生 学生—教員
  - ② 授業 学生—教員 学生—学生
  - ③ 実習 学生—実習現場
  - ④ 文章によるコミュニケーション 学生
  - ⑤ 教員 教員—教員 父母—教員

タイムマネージ：阿部 作業進行を指示 役割分担  
 KJ法  
 まとめ：論理 筋書き  
 OHP作成

- 13:35 発表 25分 (各3分発表・2分討論) タイムマネージャー  
 司会/横山

- 14:00 **WS2 コミュニケーション教育の設計：概要と目標** 115分  
 司会説明/中澤：5分 (はじめての参加もあるので、目標の表現について説明)

このWSは重要 この流れでWS3・4と進めるため  
 作業手順

- 作業1：授業テーマ案をだす。ホワイトボードに
- 作業2：各班に1テーマ すべて授業でもよい。ではどんなテーマ

作業3：ここからカリキュラム設計・シラバス表現＝FDの基本  
 授業題目・概要・目標を文字化  
 資料：シラバスフォーマットの説明および とくに目標の概念・  
 表現について超簡単に説明 (この説明は阿部でも可)

- 14:05 作業 1) コミュニケーションに関連する授業、教育の方策を設計するためのテーマを  
 各班で3課題ほど提出 10分  
 2) 5テーマにしぼり、各班に1課題を振り当てる 5分  
 司会/中澤

- 14:25 3) 概要と目標 を 文字化 50分  
 (例) ① コミュニケーションに関する授業  
 ② 文章  
 ③ ふだんの学園生活  
 ④ 専門科目の中で

- 15:15 発表45分 <各発表5分 質疑4分>  
司会/中澤 目標の表現にも着目 (FD基本ではこれを理解することがインパクト)  
次の予定のアナウンス
- 16:00 休憩 宿泊の部屋へ荷物を移動 10分  
15分 お茶とおやつ
- 16:25 **WS3 コミュニケーション教育の設計：方略** 95分  
司会説明/倉橋：説明 5分 15回の授業を設計する  
資料：シラバスフォーマットをみせて説明  
各回の授業と目標（評価）との関係も意識して
- 16:30 作業 50分  
WS2の5テーマについて 授業等の設計
- 17:20 発表 40分 <各発表5分 質疑3分>  
司会/倉橋
- 18:00 **WS4 コミュニケーションに関するある授業：コミュニケーションに授業台本を設計**  
阿部：1分 説明 各授業のなかで、ある授業の一部をシミュレーションする台本設計  
教員 チーム 学生グループ クラス  
(評価も考える)  
長谷川：WS4の説明と資料の説明： 5分：  
キーワード例 インフォームドコンセント 医療者—患者  
傾聴 医療者—患者  
専門の説明 医療者—患者  
チーム医療  
これらの発想をいれて各グループのシミュレーション授業30分（30分模擬レクチャー+10分意見交換）を翌朝、設計する。  
懇談会では、これについても語り合う  
国永：本日・翌日の動きの説明  
宿泊客が2000人 7:00に朝食  
朝食後、各グループは、適宜作業を始める。その際、荷物は研修室へ「  
8:30には、作業開始の確認
- 18:05 部屋 入浴
- 19:00 夕食 <本館3F 宴会場（未定）>
- 21:00 懇談会<本館3F 宴会場（未定）>  
司会/及川：自由懇談  
出席のチェックについて各学部ではどうしているか  
WS4の話し合い その他
- 23:00 おひらき 就寝
-

**9月14日(日)**

7:00 朝食 バイキング形式<新館1F グランシャリオ> \*混みあう事が予想されます。  
<フロントにてチェックアウト(鍵の返却・冷蔵庫精算等)を済ませてから研修会場へ>

8:30 阿部:

**WS4 コミュニケーション教育:シミュレーション授業設計**

シミュレーション授業 設計 50分 分刻みで80分授業を設計し、  
その一部をシミュレーション授業する(講義でなく、学生参加型の能動的授業)

9:20 リハーサル 25分

9:45 休憩 15分

司会/及川

① 10:00-10:40 40分

② 10:40-11:20 40分

③ 11:20-12:00 40分

12:00 昼食<新館1F グランシャリオ> (WS5テーマ決定) 50分

司会/花淵

④ 12:50-13:30 40分

⑤ 13:30-14:10 40分

14:15 **WS5:教育改革についての意見交換 課題と解決方策** 35分

司会/国永

記録:事務

課題説明 プログラム教育 阿部 5分

討論-意見交換 30分

14:50 FDアンケート 撤収

15:00 終了

15:15 出発

司会/中澤

バスのとまる場所 案内

30秒感想(ふりかえり)

16:15 札幌駅北口

16:45 あいの里キャンパス

タスクフォース グループ 阿部和厚 全体の指揮  
 タスクフォース担当グループ

	バス	導入 講/1 2	WS1	WS2	WS3	WS4	WS5	バス
阿部 全体	○		○				○	
横山			○△A	A	A	A		
中澤			B	○△B	B	B		△
倉橋			C	C	○△C	C		
及川			D	D	D	D△		
国永		△	D	D	D	D	○△	
花渕 △			E	E	E	E△		
長谷川		○	C	C	C	○C		
井出		△	E	E	E	E		

○説明 △司会

報告書 次を [ysaga@hoku-iryo-u.ac.jp](mailto:ysaga@hoku-iryo-u.ac.jp) (嵯峨 由紀美) へ 9月29日(月) までに  
 (形式: Windows/ Ward)

◎各グループのプロダクト OHP、図なども適宜にとりいれて

- 1) WS 1            ① コミュニケーションをめぐる課題
- 2) WS 2・3        ② シラバスの形式にする
- 3) WS 4            ③ 授業設計
- 4) WS 5            ④ 意見の記録 (事務でまとめる)
- 5) 感想400字程度 ④ グループ代表

◎アンケート 集計 : 事務

◎タスクフォース感想: タスクフォース全員

◎阿部: 全体をとりまとめ報告書の形にする

備品 参加者名札 (学部 氏名 肩書きなし)  
 ファイル (A4, 2穴) 各参加者に配布 持ち帰り  
 クリップボード (A4 紙 縦: うえにクリップ) 参加者 メモよう (後に回収—来年用)  
 OHP用紙 手書き用 300枚ほど  
 OHPカラーマーカーセット (細くなく)  
 レポート用紙 記録用 各グループに1冊  
 タイマー ブザーつき2個  
 持ち込み  
 OHP 1台  
 液晶プロジェクター 1台 ノートパソコン 6台  
 懇談会 用 紙皿、紙コップ、ゴミ袋  
 マイク スピーカー (ポータブルセットをもちこみ: 懇談会用) (そなえつけあれば無用)

## ワークショップのプログラム

- WS 1 コミュニケーションをめぐる課題
- WS 2 コミュニケーション教育の設計：概要と目標
- WS 3 コミュニケーション教育の設計：方略
- WS 4 コミュニケーションに関するある授業  
：コミュニケーションに関するある授業台本を設計  
/シミュレーション授業設計
- WS 5 教育改革についての意見交換

## FD合宿研修グループ名簿

グループ名は各グループで考えたニックネーム

(順不同/敬称略)

班 区 分	氏 名	
A 愛(Ai) (8名)	横山 登志子*	伊藤 泰城
	高橋 大	布目 佳奈
	上地 潤	森若 文雄
	桑原 ゆみ	水谷 博幸
B BBphone (8名)	中澤 太*	森田 貴雄
	貞方 一也	小田 雅子
	秋澤 宏行	尾立 達治
	河合 祐子	岡橋 智恵
C C&C (8名)	倉橋 昌司*	漆原 宏次
	長谷川 聡*	橋本 正則
	柴田 俊一	吉野 賀寿美
	高上馬 希重	宮崎 友香
D デンジャラス(8名)	及川 恒之*	志水 幸
	国永 史朗*	河野 奨
	國分 正廣	西村 学子
	小野 滋男	大山 静江
E Eだろう (8名)	井出 訓*	田中 真樹
	花渕 馨也*	野田 久美子
	向谷地 生良	倉重 圭史
	西澤 典子	伊藤 新一郎

\*タスクフォース

## Aグループ 「愛(Ai)」

### WS 1 コミュニケーションをめぐる課題

学生生活 学生－学生、学生－教員という形で感じている課題について

まず始めに、学生生活、特に学生－学生もしくは学生－教員という形で感じているコミュニケーションをめぐる課題について、各自が感じていることを10分ほどで書き出した。

次に書き出された課題について、KJ法を用いてグルーピング、命名した。その結果は以下の通りである。

学生－学生について

- ・ 価値観の多様化（格差含む）
- ・ CHANCE
- ・ 場所
- ・ 携帯・インターネット

学生－教員について

- ・ 多様化（ジェネレーション・ギャップ、言葉）
- ・ 態度
- ・ 理解度
- ・ 時間

### WS 2・3 コミュニケーション教育の設計：概要・目標・方略

各グループで出されたコミュニケーション教育のテーマの中から、Aグループは「医療・福祉におけるコミュニケーション」というテーマでシラバスを作成する課題に取り組んだ。その結果は以下の通りである。

テーマ：「医療・福祉におけるコミュニケーション」

履修学年：臨地実習に出る直前の学年

概要：医療・福祉現場における主要テーマを理解し、現場での他者とのコミュニケーション能力を習得する。

- 学習目標：1. 医療・福祉制度と資格について理解する
2. 医療・福祉現場での基本的マナーを学ぶ（あいさつ、言葉づかい等）
  3. インフォームド・コンセントの意義・目的を理解し実践できる  
(インフォームド・チョイス)
  4. チーム医療の意義を理解する
  5. ヘルスプロモーションを理解する
  6. リスクマネジメントを理解する

## 学習内容

回	テーマ	授業内容および学習課題
1	オリエンテーション	授業の目標と全体の流れを把握する
2	医療・保健の制度・資格	医療・保健および福祉の制度と医療有資格者について学ぶ
3	基本的マナー（１）	専門医療人としての態度・身だしなみを正しく理解する
4	基本的マナー（２）	専門医療人としての職業的マナーを習得する
5	インフォームド・コンセント	インフォームド・コンセントの概念と意義を理解し、実際例を基に学習する
6	インフォームド・チョイス	インフォームド・チョイスの概念と意義を理解し、実際例を基に学習する
7	チーム医療（１）	医療施設内の連携について理解する
8	チーム医療（２）	医療施設感の連携について理解する
9	チーム医療（３）	地域・在宅の連携について理解する
10	ヘルスプロモーション	ヘルスプロモーションの概念と意義を理解する
11	リスクマネジメント	リスクマネジメントの現状を理解し、対策を考える
12	総合演習（１）	医療人としての態度・身だしなみをロールプレイにより習得する
13	総合演習（２）	ロールプレイにより面接などを実施し、職業的マナーを習得する
14	総合演習（３）	模擬患者との面接を実施し、職業的マナーを習得する
15	まとめ	学習状況をアセスメントする

発表後のディスカッションでは、もう少し下級の学年で講義が可能にならないかという意見や、理解するという目標が多く、概念や制度と演習の繋がりがわかりにくいという意見があった。概念や制度については実習に実際に出る前に、基本をおさえ、演習で身につけるといった意図があることを説明した。

## WS 4 コミュニケーションに関するある授業：授業台本設計・シミュレーション授業設計

実際に講義の場面をロールプレイするという課題について、グループで講義の13回目である総合演習（2）を行うことにした。さらに職業的マナーについて、メンバー各自の意見を紙に思いっくだき書き出し、KJ法で意見を集約した。その内容をもとに、授業設計に取り組んだ。

30分という授業時間に対して立案した授業設計の概要は以下の通りである。

5分 導入 医療面接での職業的マナーとは？ 講義

20分 TAによる面接場面をみて職業的マナーについて学ぶ

歯科医と来院者との診療室での一場面

- ・う歯の来院者に対する問診、X-P撮影、診断や治療に関する説明
- ・悪い歯科医師の例と良い歯科医師の例について5分程度ロールプレイし、学生からの意見を聴き、フィードバックする。

5分 まとめ （実際にはこの後の講義時間で学生が面接をロールプレイしあう）

ロールプレイ後の話し合いでは、悪い例が極端すぎるという意見や、この後のロールプレイはどのように行うのかという意見が出された。

知識としては分かっている、知っているが、実際の場面をみて捉えることが出来ること、またその後実際に、学生がロールプレイすることにより身につけることをねらっていたことを共有した。また、この後の学生の面接ロールプレイでは、こうしたらより良いということを学生に考えてもらい、歯科医師と来院者役になりロールプレイを行うこと、また教員と数名のTAがその様子を観察し、教育するという設定にしたいことを話し合った。

また、ロールプレイについて、我が国ではドラマ・エデュケーションが小中学校で組まれていないため、ロールプレイをすぐに出来ない学生がいるという背景も指摘された。そのため、ロールプレイを行う時には、設定をきちんとしておくことなどが重要となることを確認した。

## **Bグループ 「BBphone」**

### WS 1 コミュニケーションをめぐる課題

「学生と学生間」、「教員と学生間」の2つに区別し、コミュニケーションをめぐる課題を討論した結果、下記のような問題点が挙げられた。

- 1) コミュニケーションをとるための基本的な言葉、語彙が不足している。
- 2) 講義を聴いていない（授業に参加しない）。
- 3) 授業内容が分からない学生が多い。
- 4) 質問しても反応しない。質問をしてこない。
- 5) 学生同士のコミュニケーションをとろうとしない。

これらの問題点は、「学生と学生間」、「教員と学生間」の両方に認められることである。また、その責任の一端は教員にもあることは否定できない。

従って、以下のような工夫が必要かもしれない。

- 1) 学生が聴くことができる講義（参加できる授業）
- 2) 分かり易い内容
- 3) 質問し易い雰囲気と内容
- 4) 教員と学生がコミュニケーションの場

### WS 2・3 コミュニケーション教育の設計：概要・目標・方略

### WS 4 コミュニケーションに関するある授業：授業台本設計・シミュレーション授業設計

授業題目：楽しいキャンパスライフのためのコミュニケーション

概要：新入生がキャンパスライフをスムーズにトラブルなくスタートを切り、新しい人間関係を築くのに必要なコミュニケーション能力をつくる

学習目標

一般目標

- ・新しい人間関係を築くためにコミュニケーション能力を身につける
- ・楽しいキャンパスライフを送るためのトラブル対処法を身につける

行動目標

- ・初対面の人と話しができる \*自己紹介ができる
- ・ヘルプコールの出し方を身につける
- ・友人関係の築き方を理解する
- ・キャンパスハラスメントを説明できる
- ・キャンパスハラスメントに対処できる
- ・楽しいキャンパスライフを送るためのトラブル対処法を身につける

回	単元 (テーマ)	講義内容および学習課題	担当者
1	初対面コミュニケーション (1)	ロールプレー 相互自己紹介 レポート課題	
2	初対面コミュニケーション (2)	ロールプレー 話の仕方、話しの聞き方 レポート課題	
3	ヘルプコール (1)	グループワーク 困ったことを話し合い、まとめて 発表する レポート課題	
4	ヘルプコール (2)	グループワーク 困ったことの解決法を探る レポート課題	
5	人間関係の築き方	講義、デモ (専門職による) 概念を説明	
6	先生	グループワーク・ロールプレー	
7	友人	グループワーク・ロールプレー	
8	先輩	グループワーク・ロールプレー	
9	一般社会との関わり	グループワーク・ロールプレー	
10	レポートのフィードバック	評価	
11	ハラスメントとは?	講義 (専門職による)	
12	ハラスメント	ケーススタディ	
13	トラブル対処法	ロールプレー	
14	まとめ		
15	発表会		

# Cグループ 「C&C」

## WS 1 コミュニケーションをめぐる問題

<学生一実習現場間のコミュニケーションの問題点>

1. コミュニケーションに起因する精神面の問題
  - 緊張・不安が強い。孤立してしまう。
  - 強く指導するとすぐ落ち込む。
  - 素直に指導者に気付いたことを伝えられない。
2. 性格の問題
  - 積極性に欠ける。
  - 指導者の指導をきけない。フランクに指導者と話し合えない。
3. 基本的な「礼節」の問題でコミュニケーションが取れない
  - あいさつができない。
  - 言葉づかい、敬語の使い方が不適當。
  - 謝ることが出来ない。
  - 友達と私語を始める。
  - 適切な服装・髪型が出来ない。
4. コミュニケーションスキルの不足
  - 質問できない。
  - 忘れた道具を友達に借りられない。
  - 患者さんと対等な立場に立てず、見下してしまう（「～してあげる」という接し方）。
5. 学力不足によるコミュニケーション下手
  - 自分で考えたり調べたりせず、たくさん質問し過ぎる。
  - 知識が不足しているため、質問できない。
  - 実習日誌が書けない、書き方がわからない。

## WS 2・3 コミュニケーション教育の設計：概要・目標・方略

[授業題目] コミュニケーションのための言葉・態度トレーニング

[概要] コミュニケーション能力、特に言葉や態度のスキルアップ

[一般目標] 自分のコミュニケーション方法に気づき、より適切なコミュニケーションスキルを身につけ、自信を持つことができる。

[行動目標]

- ① 空気が読める
- ② 話し方がわかる
- ③ 適切な発音・発声・スピードで話すことができる
- ④ 自分の話し方や声を評価することができる
- ⑤ コミュニケーションスキルに自信が持てる

[学習内容]

回	テーマ	授業内容及び学習課題	担当者
1	オリエンテーション	授業の目標と全体の流れを把握する	
2	講義	話し方、聞き方	
3	講義	非言語コミュニケーション、あいさつと敬語	
4	グループディスカッション	さまざまなコミュニケーションについて	
5	実践演習 1	ビデオ撮影 テーマ：話し方 1	
6	評価 1	振り返り、レポート提出 テーマ：話し方 1	
7	実践演習 2	ビデオ撮影 テーマ：話し方 2	
8	評価 2	振り返り、レポート提出 テーマ：話し方 2	
9	実践演習 3	ビデオ撮影 テーマ：聞き方	
10	評価 3	振り返り、レポート提出 テーマ：聞き方	
11	実践演習 4	ビデオ撮影 テーマ：非言語コミュニケーション	
12	評価 4	振り返り、レポート提出 テーマ：非言語コミュニケーション	
13	実践演習 5	ビデオ撮影 テーマ：あいさつと敬語	
14	評価 5	振り返り、レポート提出 テーマ：あいさつと敬語	
15	まとめ	講義全体を振り返って	

[評価方法] 評価 1～5 のレポート。

[備考] 授業を進めるにあたって、授業時間中に、授業の題材に用いる目的で学生を撮影することがある。

第 5 回～第 14 回までは、2 コマ運用とする。

#### WS 4 コミュニケーションに関するある授業：授業台本設計・シミュレーション授業設計

コミュニケーションのための言葉・態度のトレーニング

講義後半（第 5 回～第 14 回）は、実践演習 [80 分] と評価 [80 分] の 2 コマ 1 セットで授業を進める。各セットでコミュニケーションに関する 5 テーマを扱う

##### <第 5・6 回目 シミュレーション授業台本>

###### ● 実践演習 [80 分]

20 分： ・教員による授業目的の説明

- ・その日の講義テーマの説明（評価時に「話し方」をテーマに話し合うことは説明せず、自由にディスカッションテーマについて話し合うこと、話し合いの状況について後半で評価することを説明）
- ・授業の進め方の説明[ディスカッション、撮影]
- ・学生に撮影に関する同意を得る
- ・グループ分け(3 グループに)
- ・ディスカッションのテーマ（例：最近腹が立ったこと）の説明

60 分： ・グループごとにディスカッション開始

- ・与えられたディスカッションのテーマについて各自発言
- ・教員がカメラクルーと一緒に巡回（教員はディスカッションに加わりながら、円滑にディスカッションが行われるようにファシリテーターとして機能しながら、各グループに関与する）
- ・ディスカッション中の各学生の様子を撮影

● 評価[80分]

- 15分：・その日のテーマ（「話し方」）について考えてみることを説明し、撮影されたビデオの観賞をしてもらう  
・学生はそのビデオに関する自分の意見、感想をメモする  
特にその回のテーマ[声、抑揚、敬語など]に注目
- 50分：・該当する場面を適宜再生しながら、「話し方」に着目して、ビデオの内容について全体でディスカッション  
・教員が適宜コメント、また活発な意見交換ができるように、適宜声掛けをしていく（「声についてはどうですか?」「敬語の使い方についてはどうですか?」など）
- 15分：・教員によるまとめ  
・その日のテーマについておさらい  
・レポート課題の説明（「話し方について、考えたことや学んだことについて述べてください」など）

## Dグループ 「デンジャラス」

### WS 1 コミュニケーションをめぐる課題

Dグループに与えられたWS-1のテーマは、文章によるコミュニケーションをめぐる課題であった。このテーマに関して、KJ法により、課題を抽出し議論した。

Dグループでは、大きく以下の5つが課題になっているとの結論に至った。

1. 正しい文章  
言葉に込めた意味の違い  
表現法
2. 言葉使い  
話し言葉と書き言葉の違い
3. 表記  
字の個性  
感字（本来の漢字の意味ではなく、漢字に感情を当てた字）  
漢字が書けない  
特定の集団の中だけで通じる書き方
4. 文章特有の問題点  
返事が遅い  
伝達の方向が一方的
5. 文章の構成  
論述の困難さ  
レポートの書き方

上記の課題以外に、メールを使ったやりとりや、臨床場面やその他で文章を書かなければいけない場合の使い分けも、他のグループから意見として出された。

### WS 2・3 コミュニケーション教育の設計：概要・目標・方略

### WS 4 コミュニケーションに関するある授業：授業台本設計・シミュレーション授業設計

#### I 12回目 実習におけるコミュニケーション 2-1 病院における問題点、クレーム例の提示

①授業の説明	5分
②グループ分け	5分
③シナリオ作成	30分
④ロールプレイ	15分×2（2グループ）
計	30分
⑤まとめ	10分
総計	80分

## II シミュレーション 40分

①授業の説明 5分

②ロールプレイ <1>：不適切な患者情報の取り扱い 15分

実習指導者（薬剤師）と実習生は、病院薬剤実習<病棟実習>で、癌の末期でモルヒネによりペインコントロールしている患者に、現在の体調を聞いたところ、その患者は、吐き気や食欲不振を訴えた。指導者と実習生が、病室を出て廊下で、患者が訴えている症状の原因がモルヒネではないかと不用意に話しているのを、患者が偶然耳にし、自分が癌ではないかとの疑いをもった場면을題材にした。

③ロールプレイ <2>：不適切な対応 15分

病院薬剤実習中の学生が、窓口での実習の際、患者に適切な態度で対応していたが、わがままな患者の要望に、不適切にも切れてしまった例を題材にした。

④まとめ 5分

## **Eグループ 「Eだろう」**

WS 1: リーダー 花渕、 発表者 向谷地、 書記 西澤  
「コミュニケーションをめぐる課題」

### 1. 教員－教員

抽出された課題

#### a) 相互コミュニケーションの絶対量不足

コミュニケーションの場の不足、専門性の違い、話題が共有できないなどにより、教員間のコミュニケーション絶対量が不足する。

#### b) 人間関係のパワーバランス

上下関係、個人的なキャラクターなどの要因により、コミュニケーション上の対等性が保たれない。

#### c) 教育における情報の共有不足

互いの専門性への理解、講義内容の相互把握と調整がなされないことにより、教育内容の不備、非効率性が生じる。

### 2. 教員－父母

抽出された課題

#### a) 父母との接点そのものが少ないため、学生の情報、父母のニーズが集約できない結果、コミュニケーションがさらに不足するという循環に陥る。

#### b) 学生を介した連絡しか存在しえない、個人情報への壁などの障害によって、教員対父母の直接コミュニケーションが妨げられている。

以上があげられた。いずれの関係でも、コミュニケーションの絶対量が不足している、という共通の理解に到達した。その要因として、教員間では場の問題、パワーバランスの問題、教育システムの問題があげられ、父母教員間では、コミュニケーションを成立させるしくみの未熟が関与していると考えられた。

## WS 2: コミュニケーション教育の設定: 概要と目標

このワークショップは、コミュニケーションに関する授業題目、学部、学年設定した後、その概要、学習目標を決める。我々のグループ課題は、”人に伝える文書表現”と”医療における公的文書の書き方”である。

授業科目: 医療基礎教育

授業題目: 医療人のための文書ABC

学部: 全学部2年生

概要: 保健・医療・福祉分野における文書による意志伝達の技量を確立するために、日本語の正しい作文法、読解方法を学び、さらに、医療福祉保健領域の専門的、学術的文書を正しく作成、理解できる能力を身につける。

一般目標：

- (1) 文書を正しく読解する能力、文書を正しく書くことができる基本を理解する。
- (2) 医療系文章の特徴を理解し、正しく表現できるようになる。

行動目標：

- (1) 自分の考えを正しく表現できる。
- (2) 医系論文、レポートを正しく書くことができる。
- (3) 医療における公文書を正しく書くことができる。

学生に正しい文書を書くことをもう一度、確認してさらに、医療系の文書の特徴を理解し、正しく書けることを実践することができる授業を考えた。

### WS3 コミュニケーション教育の設計：方略

この回の目標は、テーマと内容の設定を具体的にして15コマの科目の方略設計を行うこと。

進行：伊藤 発表者：田中 記録：野田

	テーマ	内容
1	オリエンテーション	オリエンテーションと課題の配布
2	長文要約	課題を与えて、要約させ力試しを行う
3	文書表現の基本を知る【読む編】	一般的な社会的文章の読み方
4	文書表現の基本を知る【書く編】	一般的な社会的文章の書き方
5	臨床現場における文章表現の基本	
6	専門分野の文章表現	専門分野における文章表現についての解説
7	専門分野の文章表現	専門分野における文章表現についての解説
8	レポートの書き方	レポートの書き方解説・課題を与えて宿題
9	レポートの書き方	レポート課題の評価
10	公的文章の書き方	解説
11	事例設定文章作成①	各状況設定に合わせた種類と書き方
12	事例設定文章作成②	各状況設定に合わせた種類と書き方
13	ロールプレイ①	各状況設定に合わせた聞き取りと書き方
14	ロールプレイ②	各状況設定に合わせた聞き取りと書き方
15	まとめ	学習内容の確認

基礎編：2-4、応用編：5-10、実践編：10-14、総括：15

第15回では長文要約を再度行い、第2回に書いたものとの比較、学習効果を学生自身も確認できるスタイルをとる。

具体性があるので現実可能ではないかとの意見があった。

#### WS 4 コミュニケーション教育：シミュレーション授業設計

この回の目標は、今までのの内容をもとに授業のシミュレーションをおこなう。  
今回行うのは、第13回目講義「ロールプレイ①」各状況設定に合わせた聞き取りと書き方である。

講義は80分授業で行う。

- ① 講師による前回までの講義内容の復習(5min)
- ② 参加している学生をグループに分ける(5min)
- ③ 今回要約を行うビデオの内容を紹介する。(ただし、内容等には触れず、出典のみの説明となる。内容は、医療に関するドキュメント等)(2min)
- ④ 授業内容の説明（まず、「タイトル付け」10～20文字、「要約」150文字）(5min)
- ⑤ ビデオの上映(5min)
- ⑥ 考察時間（考えて書いてもらう）(20min)
- ⑦ グループ内で内容を診査してよいものを提出(7min)
- ⑧ 内容を発表（各グループによる代表）と学生による訂正、質問等(28min(⑧、⑨、⑩まとめて))
- ⑨ 講師による訂正、解説。
- ⑩ 今回の授業内容のまとめ
- ⑪ 次回行う内容の説明(3min)

今回の発表においてPC等のデバイスの必要性が明らかになった。

## WS 5 教育改革についての意見交換

司 会：国永教授

課題説明：阿部 FD 委員長

FD は北海道大学、京都大学、山形大学をはじめとするいろいろな大学で行われ、発展し教育にもその効果があらわれている。FD をやることが重要ではなく、FD をやった結果を吸収して教育の効果につなげることが最も重要なことである。FD は大学設置基準で義務化されており、さらに有効性を保障することも求められ、様々な GP (大学教育の充実/Good Practice) の審査のポイントともなっている。大学の使命とする研究と教育のうち、研究は科学研究費等の外部資金導入等により社会的な評価を受けるが、教育は今や GP などの競争的資金につながっており、重要な評価となる。大学基準協会等での大学評価 (外部評価) においても、やはり教育が中心であり、その教育を外からも見えるようにする必要がある。大学が潰れる時代になり、授業料を払っている学生へのより良い授業の提供ということには義務と責任が伴っている。大学評価自体は面倒な事ではあるが、大学の構成員全体で取り組む必要があり、教員は授業をやっているだけで良いという時代ではない。自分たちが大学をどうやって良くしていくかを実践することが求められている、評価自体も工学系大学での JABEE (日本技術者教育認定機構) が行っているように、各大学が伸びている実効性のある具体的プロセス、実践に結びついているかを求めている。

FD で勉強したことを具体的に活かすことと活かされる仕組みが必要であり、FD は実効性のあるものを計画し、教育力アップにつながることを意識して実践する状況になっている。GP についても、特色 GP から現代 GP へさらに新たな GP へと移行し、教育改善の仕組み (PDCA サイクル) がより具体的で、かつ実施体制・実効性・効果性・発展性などが明確であり、さらに全国的に通用し影響を与えるものが求められる。

このような流れの中で、本学は‘全学教育’が走り始め、これらをより良くしていくための FD のスタイルもさらに重要となる。今後はどのような FD をしていく必要があるだろうか。

### FD について

‘やればいい’から‘実効性のあるもの’とするにはどのような‘FD のあり方’があるか  
意見

- S 大学歯学部 FD はカリキュラム変更を前提に実行することを意識した FD であったため、参加者は真剣に取り組んでいた。そういう FD が望ましい。
- 問題意識をもってひとつのテーマに FD を通して取り組むことにより、作られた物にも問題意識を持つことになる。
- FD はトップダウン方式よりボトムアップ方式が有用である。その学部での切実な問題を様々な声から具体的な案にしていく。学部内での良いコミュニケーションにより、やっていく事が大事である。

- 法律の改正で、選択科目であったコミュニケーション科目が必修科目になる。指定科目となったコミュニケーション論の担当者について、あらためて日本中に目を向けていなかったことに気づいた。これを機会に、同じ科目の担当者で大学間のFDみたいなものを考えてみたい。
- 大学教育学会は日本で最初のFDを取り入れた学会で、最初は‘教授団の能力開発’としてやっていたが、今は‘授業法内容と方法の改善’と狭い意味にFDを限定している。(個人的には反対) 本学は医療系なので、単位の実質化・質保障という点では、明確な基準でのある程度の評価が出ている。教授団の能力開発は、SD(スタッフデベロップメント)も含め、大学全体での取り組みである。FDにおいて、学部学科の違いはあるが医療系大学ということでもとまることは理想である。現実的には、経営と生き残りの問題、同時に‘大学’そのものについて考えなければならぬ重大な岐路に立っている。1970年代から80年代にかけてアメリカで約5,000校の大学が造られたが、その後の10年間で数十校しか残らなかった。その状況から新興の大学が競争力を持つため、生き残るために‘FD’を開発したが、同時にハーバードやイエールなどの有名大学では、ほとんどやっていない。(レベルの違い) 大学が社会人を送り出すだけでなく、自分達自身が何をやり‘大学’という文化を形成していくということを考えなくてはならない。
- 「人件費が50%以上の大学は死ぬ」 死なないためには、皆が共有できる大学のあり方(教員は学生に育てられるというような)にFDがうまく繋がっていけば、それぞれにもう少ししっかりと課題意識を持って取り組めるのではないか。

## 全学教育について

### 意見

- 前年のFD合宿のテーマでもあった‘導入教育’ですが、いろいろな学部で既に始めていた例はあったが、全体としてのまとまりがなく、知られていなかったというだけのことで、全体を把握するシステムがうまく機能せず、不十分であったのだろう。FD委員会が、学部委員を通して学部のFD活動を十分に把握し、総括したものとして、相応しいFDは何かということを考えられているとは思えない。FD委員が委員として務めを果たしていない。トップダウンとボトムアップを融合した本学に相応しく最良のものを作っていかなければならない。
- FDが‘カリキュラム作成’だった事にびっくりした。そういうものは別組織で行うものではないかと思っていたので。今回の研修では、明日使えるカリキュラムは作れなかったが、個々人にはすぐに役立つ教育スキルを見つけられたはずである。そういった意味で、‘FD合宿研修’は大成功であり、このシステムは必要だと思う。この研修に参加してスキルアップした人を増やしていけば、教員のクオリティが上がり、大学は生き残る。このような研修にはどんどん参加してもらい、各人がディベロップすることを実感して、明日の授業に活かしていけるというような環境づくりができれば素晴らしい。たとえば、休日の研修参加の場合、代休をとる事が難しい部署があったりする。そのようなことを軽減し、参加への意欲をかきたてるような環境作りがボトムアップにつながり、実効性があると思う。

## まとめ

### ○司会

昨年のFD合宿研修は‘導入教育’をテーマとして実施され、そのプロダクトは大学教育開発センターにおいて素晴らしい鑑として活用しようとしており、いずれセンターとして提供できる導入教育の形を提示する。先生方のいろいろな力を集結するといろいろなものが生まれてくることを実感しているので、このような機会に必要なテーマを取り上げれば、何らかの形で還元できると思う。

### ○センター長

大変勉強になり、大変良かったと実感している。カリキュラムの基本設計の仕方は世界中似た形である。それを知ってもらうことも含め演劇型を試みて、個人的にも刺激になり、おもしろいものになった。上からの命令でもなく、参加者には身になっているはずだが、組織として動く力にどれだけなるかが難しく、今そこをはっきりさせることが要求されている。研修参加者がそこでの成果を自分のものにすると同時に組織としてそれを全体の大学力にしていく事が非常に大事である



## 参加者感想

---

看護福祉学部看護学科 桑原 ゆみ (Aグループ)

2日間に渡りWSを短時間で集中して行う課題であった。そのため、メンバーは各自の意見をまずはお出してみる、そしてまとめてみるという作業に集中していた。KJ法の最初の部分である、各自の意見を出し、まとまりがある内容同士でグルーピングし、ネーミングするというところを行った。このことは、各自が思いついたことをまず出す、書いてみるということや、批判せずにあるのままを話し合うということにつながっていった。

一方で、時間的な制約や様々な学部からの参加であり各自が感じている課題が多様であるということもあり、十二分に議論が深められるところまでいかなかった課題もある。

しかし、多様な教員同士が、一つの課題について話し合い、状況を確認し、思いを出し合えたことは、学部による差を確認したり、また違いの中にも類似する課題があることを発見する機会であったと考える。

ロールプレイ後に、再度グループの仲間と話し、意見交換できたらと感じた。

---

心理科学部臨床心理学科 貞方 一也 (Bグループ)

FD合宿研修には初回以来6年ぶりに参加した。今回は大学教育におけるコミュニケーションがテーマであった。研修は、阿部さん、長谷川さんのミニ講義、コミュニケーション準備体操で幕を開けた。

私は、Bグループに所属した。Bグループは、薬学部から秋澤さん、小田さん、歯学部から中澤さん、森田さん、尾立さん、心理から河合さん、私、衛生士から岡橋さんというメンバーで、グループ名はBBphoneであった。

WS1では、テーマは授業におけるコミュニケーションであり、学生-教員、学生-学生間のコミュニケーションの問題点を挙げ、それらのグループ分けを行った。

WS2では、授業設計ということで、議論の結果、コミュニケーションのための語彙強化法、ヘルプコールの出し方、グループ学習の仕方の三つの授業題目を提案することとした。全体会議の結果Bグループは、ヘルプコールの出し方を選んだ。

WS3では、まず、魅力的な授業題目名とするとして、「楽しいキャンパスライフのためのコミュニケーション・スキル」ときめ、初年次前期に授業を行うものとした。授業は新入生がキャンパスライフをスムーズに始め、新しい人間関係を築くのに必要なコミュニケーション能力を身に付けることを目的とする学生参加型授業とした。

WS4では、授業設計である。授業は初対面コミュニケーションに重点を置くので、自己紹介など、話の仕方をロールプレイなどを通して学び、また、困ったことを見出し、それを出す方法と知恵とをグループワークを通して学ぶ。人間関係の築き方、特論として、先生、友人、先輩、一般社会人との人間関係を学ぶ。さらに、ハラスメントについても学び、トラブルに対処できるようにする。なお、わがグループは、WSの本題から少し離れて議論が交わされた。例えば、人間関係については、知識の習得やロールプレイなどによって人間関係を体験したといえるかなどといったことである。WSの会場は、5つのグループがにぎやかに作業を行うため、残念ながら、議論にはまったく適さなかった。

WS5では、カウンセリングの専門家である河合さんが教師役で、第5回の授業である「人間関係の築き方」について、学生参加型授業のシミュレーションを行った。なお、学生役は聴衆全員である。まず、学生は既に4回の授業を受けていると断った上で、学生に、人間関係は自然派、それとも作る派という問いかけを行った。その結果は、3分の2が自然派であった。その次に、学生に2名ずつペアを作り、各ペアで人間関係を10個ずつ挙げさせた。続いて、2つのペアが組んで、4名のグループを作り、グループごとに人間関係のリストを作成した。最終的に、各グループからリストにある人間関係を発表させ、それをホワイトボードに書き出し、2つのグループ(すなわち、身近な関係と他人の関係)に分類した。この段階までで、学生は、人間関係について意識して考えることができ、また、コミュニケーションの輪の拡大(2→4→全体)を体験することができた。この後、実際の授業では人間関係について説明があるが、シミュレーションでは飛ばして、最後に、沢山の人間関係があること、人間関係は意識して作るものであると述べて授業を終った。グループのメンバーも学生の一人として、また、教師の補助として授業に積極的に参加した。

以上のように、BグループのWSは、時間に追われながらもメンバーの力を合わせ、無事終えることができた。Bグループの皆さん、本当にありがとうございました。

最後に、FDのテーマとして授業設計を取り上げるのであれば、具体的な目標を持って取り掛かるべきであり、十分に時間をかけて、十分議論をして授業設計を行うべきであると考えます。さらに、授業は実施して初めて評価ができるのであり、それを次の授業設計に生かすという積み重ねが大切と思われる。また、個人的には合宿研修では、宿泊して時間に追われ、体力的、精神的に大変きつく、宿泊しない研修の方がより効果的ではないかと思われる。

---

歯学部 柴田 俊一 (Cグループ)

今回のテーマは「コミュニケーション教育について」というものでありました。確かに講義や実習でもコミュニケーションをほとんどとれないため孤立してしまう学生も散見されるので、重要なテーマではあるのですが、初めは少し難しいものではないかと思いました。

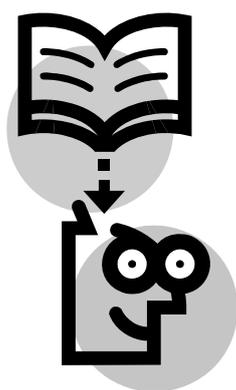
FDの内容に関して、タスクフォースとして参加された長谷川先生の講演はさすがに専門家だけあって、説得力のある素晴らしいものだと思います。先生のいわれるように、「ドラマ」教育に欠く日本の初等教育の現状を理解したうえで大学教育にあたる必要性がある、と痛感させられました。

班に分かれてのカリキュラム作成は、その長谷川先生がタスクフォースとしてC&C班に加わってもらったことに加え、メンバーが弁も立ち、作業能力もある先生方ばかりだったので、グループ代表としてはたいへん楽をさせていただきました。実際の作成作業に関しては、討論初期に「スピーチセルフモニタリング」という、重要なキーワードが提案され、それをメインテーマに備えて会議を進めることにより、比較的順調に話し合いが進んだと感じています。なんとか模擬授業でそれを実践したいということで、携帯、デジカメ等を試した結果、最後にビデオをお借りすることができ、実践できたことはたいへん運がよかったと思います。また、私自身、この授業技法に関しては全く知識がなかったので、模擬とはいえその実体に触れられたことはたいへん新鮮で、意義あるものでした(自分自身の動きを見て、なんともいえない気恥ずかしさを感じましたが)。

全体的には他学部の先生との交流もでき、意義あるFDだったと思いますが、やはりスケジュールが少し緊密過ぎたと思われます。特にせっかくのプリアンケートをとったのに、それを発表する時間がなかったのはもったいなかったのではないかと感じました。

今回、FD委員会に初の参加となり率直にいうと‘疲れた’の一言です。今までワークショップ等このような、全員参加型のものにでたことがなく、勉強になったこともあります、大変でした。周囲の先生は、教授、准教授、講師と様々な職位の人がおられ、緊張しました。オリエンテーションでは、上司でも「……さん」と呼ぶようにとの決まりでしたが、職位が上の人や、初めて一緒になった人にそんな簡単にはできず、初参加もありコミュニケーション難しさを実感しました。できればFD委員会は、グループ分けの際は、なるべく同じ職位で分けたり、配布資料等に身分等を書かないで行ったほうが、初めての人にはスムーズに入り込みやすいと思われた。

しかし、FD委員会に参加し、授業計画の立案など今まで考えたことのない事ができ、学生教育に対する難しさを実感でき、大変勉強になりました。



## タスクフォース感想

---

看護福祉学部 井出 訓

9月13日の朝、すがすがしいお天気とは裏腹に、腹部に鉛を詰め込んだようなけだるさを覚えながらバスに乗り込んだことを思い出す。3連休の2日間を、温泉とはいえ研修という名目で缶詰にされるのは、やはり気分の良いものではない。しかし、これも仕事と我が家の方向に手を合わせ、何とか気持ちを高めていこうと努力しているうちに定山溪に到着した。

講師を務めてくださった長谷川先生のコミュニケーションに関する演習は、参加メンバーの相互のコミュニケーションの小窓をどの程度開け放つのに貢献できたかはさておき、メンバーのともすると暗い気持ちに落ち込む傾向を、多少なりとも引き止める効果はあったと思われる。しかし、その後が続いた授業計画の立案むけたワークショップとのつながりは不明瞭であったと感じている。むしろ個人的には、授業計画の立案などよりは演習で行ったコミュニケーションのスキルアップ的な内容をもっともっと盛り込んでいただけたほうが、現在自分が担当している授業にも役立ったのではないかと感じている。

それぞれのグループが立案した授業計画の発表は大変おもしろく興味ある発表であったが、自分が学生として履修してみたい授業があったかといえば、一つもなかったのが実際の感想である。コミュニケーションをめぐる課題といえども、個々の学生や教員が抱えるコミュニケーションの課題は多様である。そこにいかなる授業を当て込めようとも、将来的に医療人として必要とされるコミュニケーション能力が身につけていくような授業が展開できるのかといえば、そうした授業の可能性にははなはだ疑問でもある。

今回の研修内容が今後の授業計画にどの程度役立つのか分からないが、自らのコミュニケーション能力の低さを思い知る機会となったことは間違いない。そうした意味においては意義ある2日間ではあったが、家族の冷たい目線を浴びながら温泉饅頭を差し出す居心地の悪さを感じてまでも参加する意義があったかについては、これからゆっくり考えてみようと思う。

---

大学教育開発センター 国永 史朗

### 導入教育でのコミュニケーション

「基礎学力がない」、「学習意欲がない」、そして「コミュニケーションをしようとしなない」——。大学教育で直面している学生の問題点にこのようなものが挙がっている。私立大学情報教育協会の調査でも、大学生のコミュニケーション能力の低下が指摘されている。今回のFD合宿研修は、まさにこのコミュニケーションについて、本学教育での課題と方法を知ることであった。

今回の研修で特徴的なところは、WS4でのシミュレーション授業設計である。ある授業の一部についてシミュレーション台本をつくり、それを実演する内容であった。Dグループ(デンジャラスグループ)のタスクフォースの一人であった。夕食後、この課題についてグループの教員の方たちと、夜を徹して取り組んだことが印象に残っている。グループの若い教員の熱意にこもった議論と演技に接し、大いに感動させられた。このWSでは、いろいろな教員の方たちによるパフォーマンスがあった。普段知ることのできない教員の個性に満ちた姿に触れることができ、たいへん有意義なものであった。

今回の研修で、あらためてコミュニケーションに関する教育の必要性を痛感した。本学では来春から全学教育が実施される。その導入教育のところで、これに関する教育内容を含めることも一考である。現在、開発センターで導入教育の充実に向けての作業を行っているが、今回のWSによるプロダクトを大いに参考にしていきたいと考えている。

導入教育では少人数による教育が基本となるであろう。教員と学生との距離を短くして、学業への動機付けを行うことが大切である。そこでは教員と学生間とのコミュニケーションのあり方が一つのポイントになる。言語による情報伝達は無論のことであるが、むしろ感情や気持ちを非言語的コミュニケーションで表現する場にすることが大切である。感情の符号化によって、学生を励まし、期待感を抱かせることが重要である。「ピグマリオン効果」、まさにそれを生み出すようなコミュニケーションが求められる。教員からの実質的な褒めの言葉により、学生自身にある期待を抱かせ、その期待に沿って学生を変化させることが可能である。自己成就予言をよい方向に促すような一つの場にする。導入教育の場をそのような場にしなければならない。

今年のFD合宿は三連休の初日に実施された。そんなわけで出発の朝、札幌駅北口広場は行楽地に向かう大勢の人でごった返していた。絶好の日和の下、わくわく気分の人たちを背にしての出発であった。しかし、今年も例年のことであるが研修が終わると一つの達成感があった。いろいろな教員の方たちと交流することができたという満足感である。教員の方たちとのコミュニケーションを通して、いくつかの点で教育に対しての考え方を共有することができた。全教員による教育力ならぬ「共育力」のもとで、これからも学生のための一つの力にならなければならないと改めて肝に銘じた次第である。

---

大学教育開発センター 倉橋 昌司（看護福祉学部）

今回のFD合宿研修のテーマは「大学教育におけるコミュニケーション教育」であった。これまで参加した3回の研修と同様、参加者の作業がテーマに沿った授業科目の設計だとすると、最も難しいことになるだろうと考えていた。しかし、幸いにも(?)、今回はタスクフォースということで、参加者の皆さんの仕事ぶりを見せていただくという立場であり、少々余裕を持って参加させていただいた。

看護福祉学部では、来年度から、看護師、保健師、社会福祉士、精神保健福祉士、介護福祉士と、学部が関係する全ての国家資格取得に必要な指定科目の授業内容の見直しが行われる。そこでは、共通して、コミュニケーション教育がより一層必要とされている。看護師養成基礎分野においては、科学的思考力およびコミュニケーション能力の向上、基礎看護学分野においては、コミュニケーション、フィジカルアセスメントの強化が留意点としてあげられている。社会福祉士養成教育シラバスには、相談援助における援助関係において、コミュニケーションとラポールが教育内容として想定されている。また、介護福祉士養成カリキュラムには、人間と社会、人間の理解の分野において、人間関係の形成とコミュニケーションの基礎が、介護の分野において、コミュニケーション技術が、それぞれ教育内容として想定されている。

対人援助職において、共通して求められるコミュニケーション技術、能力とはどのようなものか、それに必要な大学における教育とはどのようなものか、今回の研修はこのような今後の重要な課題を全学的に考える良い機会になった。

研修では今回初めて、授業設計に引き続き模擬授業が行われたが、授業はそのテーマで初めてとはとても思えないような出来栄で、参加された教員の方々の能力の高さには驚かされた。必要なのは教員の能力を十分引き出すことができる大学システムの構築のように思えた。

---

看護福祉学部 長谷川 聡

今年度FD合宿のテーマが私の専門のコミュニケーション教育に関連することから、初参加にも関わらず、阿部和厚教授のご指示でタスクフォース・メンバーに任じられた。これまで学内では情報センターのお役目でお付き合いいただいてきてため、参加者から「長谷川さんは情報がサブで、コミュニケーションがメインだと初めて知った」「コミュニケーション論（学）なんて分野があることを初めて知ったし、ウチの大学にそういう人がいるなんて知らなかった」と言われた。FD委員・他学部・他学科・他学校の諸先生方とのコミュニケーションが深まったことが最も大きな成果だった。

時間の関係でコミュニケーションスキル教育の理論的基礎の解説はとばし、アイスブレイキングを兼ねて、皆さんにさっそく私の授業「コミュニケーション障害論/実践論」の演習用アクティビティを一つ二つ体験していただいた。思いのほか（失礼）に反応がよく、コミュニケーション論で言うところの「フォーカス理解」がしっかりおできになるので「流石！」と私のほうが声を上げた。それがきっかけとは思わないが、当日プログラムに従った「コミュニケーション」をテーマとしたシラバス作成や模擬講義の発表は、専門が違う先生方とは思えない出来栄の「シナリオ」と「演技」だった。コミュニケーション教育の視点をカリキュラムやシラバスに取り入れることの共通認識は持てたように感じている。休憩時間や懇親会などの雑談・議論・放談からも、皆さんが「若者論」「学生の言葉遣い・人間関係」「教師・学生関係」に明確な問題意識や見解をお持ちであることも具体的に確認できた。

さて問題はこれから・・・研修時の振り返りでも提起された「研修後」である。参加者の個人的関係や個人的体験としてのFD合宿の成果を、学科・学部内乃至全学的な「形」にしていくプロセスと、合意可能なシステム・イメージを示していただき議論できればと思う。

---

看護福祉学部 横山 登志子

タスクフォースとして役割分担したのは、ワークショップ1の司会進行（説明含む）であり、その他はAグループに入った。

ワークショップ1の説明と発表の司会進行については、決められた内容どおり辛うじて進めることができたが、FD合宿が初めてであったことも関係して、Aグループにどのような役割で入ったらいいのかよく理解できておらず、最後までメンバーとしての参加になった。タスクフォースとしてAグループの話し合いにも一定の役割を取る必要があれば、それなりの準備が必要かと感じた。

FD合宿全体を通しての感想としては、コミュニケーション教育というテーマのもと、小グループで

授業設計をし、模擬授業を行うという普段体験できないよい学びの機会となった。時間配分の短いワークショップもあったが、授業の組み立ての方法と、コミュニケーション教育の内容との両方を学ぶことができ、個人的には多くの成果を得た。

しかし、この研修の方法については検討の余地もあるように思われる。後期第1週目が終了した土日であったために負担が大きかったこと、昨年度よりは時間的に余裕があったとのことだが、初回参加者には時間に追われる感がとてもあったこと、2日目の最後のワークショップについては集中力が途切れてしまっており、あまり効果的でないということなどである。



## アンケート集計

## 平成20年度北海道医療大学FD合宿参加者プレアンケート

氏名

連絡先 e-mail

FAX

1. あなたは、担当する授業をすすめるうえで、コミュニケーションと関連して、どのような困難・問題を感じていますか。

担当学年 科目名

授業を進める上での困難

2. あなたは、その困難を解決するために、どのような工夫をしていますか。

3. あなたは、教育上でコミュニケーションに関連して、その他にどのような問題に気付いていますか。

どのような方策（授業その他の教育指導）が必要と考えますか。

4. FD研修の機会に、コミュニケーションに関して、意見交換したい課題はありますか、あるいは知りたいことはありますか。

5. 学生のコミュニケーション能力を身につける、あるいは能力向上のために、普段から教員が示すべき、態度・習慣、指導はどんなものがありますか。

平成20年度北海道医療大学FD合宿研修参加者プレアンケート

1. あなたは、担当する授業をすすめるうえで、コミュニケーションと関連して、どのような困難・問題を感じていますか。

①担当学年 科目名

②授業を進める上での困難

1)	①	薬学部第一学年「化学通論ⅠおよびⅡ」「基礎化学」薬学部第一学年および歯学部第一学年「自然科学実習」心理科学部第一学年「物質の科学」
	②	科目の性質上、道具としての数学や物理学の基礎部分が必要であるが、近年、学生この分野における基礎学力の格差が大きく、戸惑うことがある。
2)	①	1 学年 薬用植物学
	②	学生数が多い（全員に目がいきとどかない、全員が授業に集中しているわけではない）
3)	①	3 年生 薬剤学実習、OSCE など
	②	短期間で大勢の学生と接する
4)	①	薬学部 2 年 基礎薬学Ⅰ実習 薬品物理化学
	②	自分の意図したことが、どの程度学生に理解されているか、判断しにくい。
5)	①	歯学部1年 歯の解剖学 歯学部2年 組織学
	②	授業を80分聞くだけの集中力がなく、ほとんど授業開始から眠ったり、私語をしている者がいる。特に歯の解剖や、歯の組織は将来直接仕事に関係するものなので、もう少し「職業意識」を持ってもらいたいと希望している。
6)	①	微生物学、口腔微生物学
	②	・学生の私語 ・学生の基礎的日本語能力
7)	①	歯学部4～6年 歯科麻酔学、歯科麻酔学実習、総合医学、特別講義、ローテーション 歯科衛生士学校1～2年 歯科麻酔学
	②	歯科麻酔学は生理学や生化学に立脚した学問分野が多く、歯学部の学生にはこの分野での勉強が不足しており、難しいと感じるようです。
8)	①	歯学部4, 5, 6 年 全部床義歯補綴学、部分床義歯補綴学
	②	授業内でどのように学生とコミュニケーションをとったら良いのかわからなく、一方通行の授業になってしまう。
9)	①	2 年生 歯科理工学
	②	授業に対して、全くやる気はないし、興味もない学生の存在
10)	①	歯学部 3 年生 薬理学・歯科薬理学実習
	②	学生がどの程度、授業の内容を理解しているかの把握が難しい。
11)	①	4 年生 歯内療法学実習
	②	まともに会話が出来なかつたり、返事ができない学生とのコミュニケーションをとる事に困難さを感じる。
12)	①	歯学部4年・5年 歯科矯正学基礎実習・歯科矯正学臨床実習
	②	現在、実習のみを担当しているので、授業に関する意見ではないが、実習の説明・デモンストラーションを受けた学生がどの程度理解できているかが把握できない。
13)	①	助教なので正式な授業・講義は担当しません。ゼミ・実習等での所感を記述します。
	②	受ける側の理解度が計り知れない
14)	①	記載なし
	②	授業内容を学生が理解しているかの有無、また具体的にどのように理解したかについて確認したい時が多々ある。しかし学生に反応を求めても戻ってこない場合の方が多い。
15)	①	3 年・編入4 年 地域成人看護援助論 3 年・編入4 年 地域看護学演習Ⅱ
	②	援助者として、コミュニケーション技術をもとに、専門的知識を活用しながら、地域に住む住民の援助の基本を理解し、演習を通じて援助技術を学ぶことが科目の目標になっている。そのため、コミュニケーションに関連した課題が生じている。コミュニケーション技術を学ぶ際に、それまでの学生が行ってきたコミュニケーションパターンをふり返り、長所を

		伸ばし、改善した方が良い部分は検討することになるが、これまで実施してきた学生自身のコミュニケーションが乏しく、あえて他者に踏み込まないように対処している学生が多くなっているような印象を受ける。このことが、学習を進める上でも課題となっている。
16)	①	2年 精神看護学 3年 精神看護学演習
	②	3年後期からの精神看護学実習に向けて、精神看護学では基本的なコミュニケーションについて、特に精神看護学演習では、精神専門領域における対患者との双方向的コミュニケーション、相互作用の理解を目指しているが、なかなか成果が表れないように感じる。
17)	①	主要担当各目の担当学年：看護福祉学部臨床福祉学科第2学年 科目名：社会福祉原論
	②	この科目は理論系科目であるため、到達目標は知識量やその応用力で評価されるものである。しかも、その成果は、国家試験によって評価されるため、ゆとりある授業計画を組むことが困難である。したがって、(学生とのコミュニケーションによる)双方向的授業というよりは、一方的な知識注入型の授業展開になりがちである。
18)	①	精神保健福祉援助技術各論
	②	・学生との双方向のコミュニケーション ・受身な態度、社会人としての基礎教養
19)	①	福祉1年 情報処理演習 心理1年 コミュニケーション実践論 看護・福祉2年 コミュニケーション障害論 福祉3年 保健医療福祉情報論・保健医療福祉情報論演習
	②	private communication は得意でも public communication が苦手 individual communication は得意でも group communication が苦手 Chattering や conversation は得意でも dialog が苦手 そんな困難を感じています。
20)	①	ソーシャルワーク直接援助論
	②	講義科目ではあるが、内容は援助技術論なので、知識学習以外の部分で工夫が必要と感じている。その際、学生との双方向型の進行をどのように進めるか毎年、頭を悩ませている。
21)	①	第2学年 社会保障論(看護・福祉)
	②	学生に問いかけをしても反応があまりない(わかる/わからない等)大勢の前で自分の考えを述べるできない学生が多い。
22)	①	臨床心理第1学年 情報処理演習
	②	コンピュータ、ネットワーク、ソフトウェアのトラブル解決に多大な時間をとられること。情報機器の性能が高度化し、人と情報機器のコミュニケーションが困難になってきていること。
23)	①	3学年 カウンセリング
	②	特に困難は感じておりませんが、各自のコミュニケーション・スタイルがあり、各自で動機づけレベルや精神面での安定度が異なることを念頭に置き、ロールプレイやグループディスカッションを進めています。
24)	①	臨床心理学科 1年(解剖生理学) 言語聴覚療学科 1年(解剖生理学のうち生理学)
	②	特にないが、いつも学生が興味をもって聞いているかどうかの反応は気にしながら進めているつもり。
25)	①	1年次「哲学」、4年次「哲学」
	②	4年「哲学」は60人くらいの規模だが、1年「哲学」の一つ(看護福祉学部)は、170人くらいの規模で、毎回小レポートに返却も困難であり、双方向型教育も学期始めに考えるだけに留まっている。
26)	①	全学年 耳鼻咽喉科学、医学総論、成人発声発語障害学演習、音声言語聴覚医学、言語聴覚障害概論
	②	学生が主体的に授業参加に取り組むために、個々の興味、意欲を高めること。
27)	①	心理科学部 2学年 神経学、脳神経外科学、脳科学
	②	心理科学部両学科学生数が130名と多く、縦長教室での診療の実際を伝えることが困難
28)	①	看護福祉学部看護学科1学年 人体機能学1および2、人体機能学演習
	②	時間の制約もあり、学生の学習内容の理解がどの程度のものか、十分把握できない。
29)	①	第1学年 人間科学基礎演習

	②	少人数（6～10名）の演習形式で壁新聞の作成を行うが、積極的に参加する学生と消極的な学生がおり、グループワークに参加できない学生や、課題を怠る学生もいる。全体でのコミュニケーションが行えるよう、個々の学生に対応した指導をするのは難しい。
30)	①	学部2年生 臨床心理アセスメント演習
	②	授業を熱心に聞く学生もいるが、一部に聞かずに後ろを向いて話をしたり物を食べたりしている学生がいる。後者の学生の対応と、どうしたら授業に興味を抱くのか難しさを感じている。
31)	①	1学年 歯科診療補助
	②	歯科診療補助は歯科衛生士の業務の1つであり、実技が多い。臨床実習指導者より求められるハードルが高く、約1年で習得させることが難しいと感じる。特に実技面では得手、不得手があり、細かな作業に対して苦手意識を持ち、自信をなくす学生もいる。
32)	①	第2学年 歯科予防処置
	②	<ul style="list-style-type: none"> <li>・事前講義で実習内容を確認するが、実習準備や実技実習ができない学生がいる。</li> <li>・自分が実習する事をイメージしながらデモンストレーションを確認することができない。</li> <li>・理解できていなくても、そのまま実習してしまう。（学生の理解度に差がある）</li> </ul>

**2. あなたは、その困難を解決するために、どのような工夫をしていますか。**

- 1) 部分的ではあるが、少人数による演習を実施し学生の能力を確認しながら、解説するよう心がけている。
- 2) 話だけではなく触ったりできる教材を組み入れる。教室のうしろ側にも行く。
- 3) ひとりひとりとなるべく時間をかけコミュニケーションをとるようにする。積極的に質問し、指導する。
- 4) 実習中に、巡回して何度か同じことを個別に説明している。
- 5) パワーポイントよりも板書を多用し、時に黒板をたたいたりして刺激を与えている。また自分自身の経験に基づき、臨床の話も取り入れるようにしている。
- 6) ・大きな声で注意を喚起する
  - ・専門分野以外の内容にも説明を加える
- 7) 基礎的な事項について繰り返し教育を行っています。
- 8) 普段から、とにかく学生に話しかける。
- 9) 学生の興味を引く、視覚素材などを用いる。
- 10) ・授業（実習）中に学生に質問し、答えさせる。
  - ・実習レポートにより、学生の理解度を把握する。
  - ・実習発表会において、学生に実習内容を発表させるとともに、その発表内容についての小テストを学生全員に行う。
- 11) なるべくこちらから話しかけるように努力する。
- 12) ・マルチメディア教材を用いて分かり易い説明とデモンストレーションを心がけている。
  - ・一部の学生に対し、理解できているか否かを確認している。
- 13) 大切なことは繰り返し話し、指導
- 14) 講義中なるべく学生に問いかけるようにしている。それは上記のことだけではなく、他に質問や軽い話等でもなるべく多く問いかけ、私一人が話すのではないよう心がけている。
- 15) 学生が、自分をふり返り、その上でより良いコミュニケーションについて検討出来るように、演習を取り入れている。また、コミュニケーションをふり返るために、録音し逐語録に起こすなどして、演習を想起し、評価し、より良いコミュニケーションについて検討することができる課題を課している。また、演習には部門の教員の協力を得て、学生がすぐに教員に疑問を尋ねたり、演習直後や時をとらえた指導ができるように配慮している。
- 16) 実習で実際に使用する記録用紙を活用したり、事例を交えながらリアリティーが感じられるような授業を実施。演習を交えて、実際に自己理解と他者理解を深める学習内容を取り入れている。
- 17) 授業中、学生が自らの経験にもとづいて答えることができるような質問を心がけている。また、学生が答えに窮した場合には、質問の仕方（開かれた質問→閉ざされた質問）を変えたりしている。その答えをもとに、ある程度の授業展開をすることもある。
- 18) なるべく現場の話題を多く取り入れたり、当事者をゲストに招き現場感覚を盛り込む

- 19) ・講義形式を減らした、コミュニケーション重視の実技・演習中心の実践・体験式授業方法の導入
  - ・講義形式の場合も、言語訓練としてテキストやレポートの学生による音読を意図的に取り入れた授業
  - ・特に1・2年の場合は出席カードの裏などの紙片に「ひとことレポート」に、これを休みなく行うことで「言葉にする・書く」習慣を身に付けさせる。
- 20) 知識学習以外の部分では、事例を用いて小グループで検討させ、最終的に個人レポートにまとめること、演習的な要素の取り入れ（面接技法など）を行っている。
- 21) できるだけ身近な例を出して解説する。あきらめずに何度も（毎回）問いかけをする。
- 22) ・情報機器のトラブルには、マニュアルを読む、インターネットで調べる、メーカーに聞くなどして、対処するが、解決策が見いだせないことも多い。
  - ・Windowsの裏技などの本を購入し、勉強しているが、そもそもこのような本があること自体が奇妙と思う。
- 23) ロールプレイは、台詞を読み合うものを中心に進めることにより、「わかる」感、「できる」感を全員が持てるように配慮しています。また、授業時の様子や、ミニレポート・中間試験の内容などからサポート（注意）が必要な学生さん（達）を把握しつつ進めています。
- 24) 授業を興味深くする。メリハリをつける。要点を明確にする。
- 25) ・小レポートの中で、他の学生の意見や考えを知るのに適した課題を取り上げ、大体20～30くらいのもを選び、それらを縮小コピーにかけプリントし学生に配り、それに対して感想あるいは批評を書かせるという、いわば紙上討論のかけらに近いものに留まっている。
  - ・以前、テーマをそれぞれ選択させてグループによる調査、研究そして発表という形態をとったことがある。それは生命倫理に関してであったが、哲学ではなかなかそうしたテーマ化は困難で、最近はまだしていない。
- 26) 自身が高い学術的見識をもち、それを十分に学生に伝達するために、教員→学生への講義を充実させる事が基本である。これが達成されれば、学生からの質問、意見等の反応は良好となり、教育におけるコミュニケーションは自然に成立する。
 

学生→教員への表出が行われた場合、諸業務に優先してこれに対応することを原則とする。学生参加型の教育（PBL等）については、まだ大学に参加して間がないので、今後学んでゆきたい。
- 27) 画像所見を多く取り入れている工夫をしている。
- 28) オフィスアワーを利用し、学生の質問に丁寧に回答する。
- 29) できるだけグループワーク、討論、手作業を行う内容とし、少しずつ会話がもてる場を提供するようにしている。また、雑談の時間が重要な役割をもつので、適度に自由な時間を間に入れるようにしている。ただし、サボる学生に対しては、相応のペナルティを与え、個人的に厳しい指導も与える。
- 30) できるだけわかりやすい説明と、ただ受身に聞くだけではなく自分で課題をこなしたり、講義を聞いたりと時間の使い方にメリハリを持たせている。
- 31) ・実技のハードルを越えるためには実技試験の実施や実習時間に余裕がある場合、口頭試問のような復習をしている。
  - ・実技試験が不合格の学生に対しては、放課後練習を促し、個別に指導している。
- 32) ・事前にプリントを配布し読ませる、実習要領を写真などで説明するようにする。
  - ・模擬実習ではペアになる学生と相談し確認しながらできるようにする。
  - ・実習準備物などはデモ用の場所に設定しておき、その状態を真似すればできるようになっている。

3. ①あなたは、教育上でコミュニケーションに関連して、その他にどのような問題に気付いていますか。

②どのような方策（授業その他の教育指導）が必要と考えますか。

1)	①	教育上でのコミュニケーションには情報の共有が必要とおもいます。第一学年を担当しているので、子供気分の残る学生と年齢差の大きい当方では、有している情報の差異を感じる。
	②	友人以外の他者とのコミュニケーション能力の向上や、広い分野への興味付けが必要と思う。
2)	①	普通に会話をできない学生が見受けられる
	②	威圧的にならないように配慮する。
3)	①	コミュニケーションの方法は多種多様である。

	②	少人数でのグループディスカッションなど
4)	①	こちらの思いこみなどで説明不足によって、相手が思いがけない行動をすること。
	②	丁寧に説明する。
5)	①	教える側が感じている教育上の危機感が多くの学生に伝わっていないと思います。
	②	あらかじめ予習、あるいは基礎知識があって初めて成立する授業形態が必要だと思います。(一般的な大学院の授業やセミナーのような形で)
6)	①	精神的にもろく、友人付き合いがうまくいかず、内に閉じこもって自らにストレスをかけてしまう者が、かなりの頻度で見受けられる。
	②	正直なところ、かなり対応が困難だと困惑している。「こういう将来像が描ける」という将来像を具体的に示し、無理しない程度に激励を与え続けることが必要か、と考えている。
7)	①	学生相互の連帯感が欠如しているため、学生同士の会話が少ないのではないかと
	②	難しい
8)	①	教師と学生とのコミュニケーションも大切ですし、患者との円滑なコミュニケーションを計る事も医療人には欠かせない資質であると考えています。
	②	敬語や丁寧語の使い方、社会的な教育が必要であると考えます。
9)	①	授業でわからない事があるのにも関わらず質問をしない。
	②	教員が一方向的に授業を行うのではなく、学生参加型の授業を行う。
10)	①	授業をしているが、こちらはわかっているが、学生は全くわからず、ただ単に時間が過ぎていつている。
	②	なるべく双方向な授業体系がいいとは思いますが、学生数が多いので限界があると思います。
11)	①	質問に来る学生があまりいない。質問に来るのが億劫なのか、わからない点をうまく説明できないのか。
	②	教員の方で質問しやすい雰囲気を作る。わからない点をうまく聞き出すようにする。
12)	①	学ぼうとする意識が低いので教員の意識とかなりずれがある。
	②	個別の指導時間があればよいと思うが、教員の時間と人数が足りないため不可能だと思う。
13)	①	現在、基礎実習の際の説明とデモンストレーションは、ビデオカメラとモニターを通したマルチメディア教材を用いて行っている。しかし、一人対学生100人前後の体制で行われているため、理解度の確認などが行えないことがよくある。
	②	少人数で行うことが望ましい。このことは、講義を行う側からすれば各学生の理解度を確認しやすいし、学生の側からも質問がしやすいなどの利点があると考えられる。
14)	①	昔(自分の学生時代)とは異なる教員と学生、+父兄との色々な意味での関係・関連
	②	理念を持って、自分のスタンスを示す
15)	①	大学の講義のため、講義室に100人以上の学生が集まり、講義を聴き、学生からみると情報を受け取る、一方向のコミュニケーションパターンが多くなることも課題と考える。このような状況に慣れていくと、受け身の姿勢が強くなるように思われる。大勢の前で、質問することができず、かといって個別にも教員室を訪れることも躊躇している様子が伺える。
	②	講義中に、意図的に双方向のコミュニケーションパターンを活用する。記録へのコメントの記入、提出物へのフィードバックを口頭で次の講義で行うなど、教員が学生の反応に応答している姿勢を学生に知ってもらふ。過度な緊張を生まないように配慮しながら、学生に質問し、答えを引き出す。
16)	①	日常的に、個性的でユニークな発想を発言する機会が減っているためか、また自分の感情をストレートに表現する機会が少ないためか、特に自分の感情に気付くことが下手な学生が多い。
	②	自己洞察の機会を強化することが必要だと思うが、複雑な経験をしている学生もいるため、どこまで強化できるかは自信のないところです。
17)	①	コミュニケーションには、“言語的なもの”“非言語的なもの”、さらに“言語的なもの”の中には、“会話”によるもの、“文章”によるもの等がある。近年、会話力の低下が問題視されているが、文章力にもかなり問題がある。社会福祉専門職にとっては、記録は非常に重要なものである。
	②	文章力については、添削指導が有効であろうが、演習・実習系科目の少人数授業ならば十分に可能であるが、一般の講義系科目では難しい。教員の授業外負担の軽減や院生の教育能力訓練のためにも、TAの活用を工夫するのも解決策の一つといえよう。

18)	①	記載なし
	②	早期に学生の学習、生活ニーズを把握しサポートする教育体制
19)	①	緊張・集中すると「場面緘黙」「無表情」「無動」になる学生が多く、なかなかリラックスした雰囲気・状況にならない、あるいは自らそのように場を変えていくことのできない学生が多いように感じる。それが他者から「固い」「反応しない」「わかったのかわからないのかわからない」という否定的な評価を受けやすい「損な行動」の学生が増えている。
	②	・「実践・体験」型の導入教育の充実 ・読書習慣、文字を読む習慣を身に付けさせる環境作り
20)	①	学生は知識提供型の授業に慣れすぎているので、小グループでの話し合いに入るまで時間がかかってしまう。ウォーミングアップ的な要素を取り入れることで多少、スムーズにはいるが、もう少し思い切った学生主体型の授業設計を何回か取り入れる必要があるように思う。
	②	事例を提示して、実際に援助展開を細部までシミュレーションする。その際、理論根拠や面接技法、体験によってわかったことなどを明らかにしておく。しかし、これをするには時間（事例検討に数回しかかけられない）と場所（イス固定）などの問題もある。
21)	①	履修者が多い授業の場合、双方向で授業を展開するには物理的な限界もある。「知識」を教授し、学生に覚えさせる必要がある場合、どのような方法が有効か？
	②	1年次の段階で、基本的なコミュニケーションの方法についてしっかりと教えるべき（読む・書く・報告する・議論する）
22)	①	人と人とのコミュニケーションにおいて、携帯やネットワークを介してのコミュニケーションが非常に大きなウェイトを占めていること。
	②	ネチケット、個人情報保護、デジタルコミュニケーションの不安定さについて、十分な指導をする。
23)	①	発達障害や発達障害的な傾向があるが故に、対人関係が築きにくかったり、コミュニケーションがスムーズにとれないこともあると思います。また、聴覚情報の処理が苦手な学生さんがかなりいるような気がします。
	②	吟味された視覚情報提示と、簡潔で道筋だった聴覚情報の提示、そしてメンタル面でのサポートという点で学生相談室の拡充・整備が思い浮かぶところです。
24)	①	学生との交流が大切である。
	②	コミュニケーションの本質的改善はFDなどによる文章化で行えるとは思わないが、学生参加の授業と学生と教員の交流が大切
25)	①	・本当に双方向型教育やコミュニケーションを円滑に運ぶためには、一クラスの数も当然条件にはいるが、やはり、1週間に担当される科目が多すぎるため、学生とじっくり討論等を進める時間がなさ過ぎるように思える（つまり、調べたり、講義を通じてそれを展開したりするため）。アメリカ型の1セメスターに取れる科目が3、4科目などと贅沢は言わないが、またイギリスのように、数人の学生をもつチュートリアル制も困難があるが、科目をもっと絞ってじっくりと向かい合わないと、コミュニケーションといっても無理だと思う。 ・グループ学習のような形態を考えるのも良いと思うが、学生間のコミュニケーションは或る程度取れるものの、大学での講義と言えるのかは疑問
	②	・上記のように、現行の過密スケジュールでは、教師も学生も取り組むことは困難 ・せめて、毎回のレポートを返却したりすることで、学生とのやりとりができればよしとすべきか。
26)	①	専門臨床教育（言語聴覚学科の場合は、聴覚発達系、発声発語嚥下系、高次障害系）グループ間での情報意思伝達が密でない
	②	カリキュラム構成の問題点を年度ごとに再検する。担当教官とその専門領域が流動しているのだから、必ずしも上記の区分けが固定的である必要はない。
27)	①	記載なし
	②	小グループでの実際的な指導
28)	①	自己覚知（自分自身をまずよく知る）ののち、他者理解をすることの重要性。教員と学生の知識格差の認識。

	②	学生自らが考える授業、個別の事象を全体にフィードバックすることの訓練
29)	①	厳しい指導をどこまで行うのが難しい時代である。双方向的なコミュニケーションを成立させるには信頼関係を築くための時間が必要となる。なんでも「双方向」とか「学生の意見を反映した教育」などといったことを官僚的にただやればよいということではない。
	②	学生の立場や条件が異なる各学部学科により、各学年により、各科目により、どのような教育のやり方が望ましいかという細やかな指導方針を立てて行く必要がある。一般的に教育を語ることにほとんど意味はない。
30)	①	学生の学力の低下を感じており、就職組みは別として、大学院を目指したいという学生に対して強い口調で多くを指導してしまうと学生は吸収できないし、かといって問題点を指導しないと学力は向上しないため、程よい指導がどのようなものか難しさを感じている。何度指導しても同じところで間違える学生が多く、指導の効果に限界があると思う。
	②	何でも指導を求めるが、まず自分でじっくり考えるくせをつけてもらうことが必要だと感じる。せめて見てもらいたいと思う書類は自分で読み返し、推敲してから持ってくるように指導したい。
31)	①	特に専門学校は受験者のほぼ全員が入学する傾向があり、学力の差が激しい。基礎学力がなく、漢字も読めず、教科書の意味がわからない学生もいる。そのような中でどこに焦点を当てて授業をしてよいか迷うこともある。
	②	もう少し、少人数制で対応できれば、細かいケアができると感じる。(特に実習では)
32)	①	<ul style="list-style-type: none"> <li>・人の話を聞いて理解できない学生、文字が読めない学生が増えている。</li> <li>・言葉で表現できない、または表現することに慣れていない学生が増えている。</li> <li>・自分で問題解決するよりも他人に確認して解決しようとする。(自分で考えない)</li> <li>・学生間でも話ができない。</li> </ul>
	②	<ul style="list-style-type: none"> <li>・グループワーク</li> <li>・事例検討実習</li> <li>・少人数での教育</li> </ul>

4. FD研修の機会に、コミュニケーションに関して、意見交換したい課題はありますか、あるいは知りたい事ことはありますか。

- 1) 問題をかかえている学生とのコミュニケーションのあり方
- 2) 「コミュニケーション」の定義がよくわからないので、特にありません。具体例がないので、考えられません。
- 3) 学生以外（父兄、職員同士）とのコミュニケーションについても知りたい。
- 4) こちらの得たい情報を得るためには、どうしたら良いか？
- 5) いろいろ聴いてみたいです。
- 6) 授業内容は、能力レベルのどこに基準を置いて行うのが良いのか？
- 7) 以上の質問に対して参加者はどのような返答をしているのかということは興味深いことです。
- 8) どうやって学生に、自分のわかっていない点を説明させるか。
- 9) コミュニケーション不足を解消するための方策など（少人数制以外の方法で）
- 10) 歯学部教育について
- 11) 他の教員の皆さんが、どのような課題を感じ、どう対処されているのか伺いたいです。
- 12) 学生自身のクライアントに対する影響力に気付かない学生が少なからずいるように思えるが、他の分野ではどのような状況なのか？また、どのように相互作用を理解してもらう取り組みをしているのか？
- 13) 社会福祉専門職は、いわば“相談援助”をメインとする専門職であるため、ソーシャルワーク系の講義や演習・実習等をとおして、コミュニケーション理論や技法について学んでいる。他学部においても、対人臨床の専門職業人を養成しているわけであるが、学生のコミュニケーション能力の向上を目的とする取り組みとして、どのようなことをおこなっているのか。
- 14) 各学部・学科の専門領域あるいは専門分野の現任者、卒業生や実習指導者などから、医療・福祉の現場でどのようなコミュニケーション問題が話題になっているか、知っている先生がいらっしゃればお話を伺いたい。

- 15) 援助技術論や技法論系の講義科目についてどのように学生のコミュニケーション能力を引き出していくかについて意見交換を行ってみたい。
- 16) 演習科目ではなく、講義科目で履修者が多い場合、コミュニケーションを使った方法として具体的にどのようなことをやっているのか（視聴覚教材やリアクションペーパー以外）
- 17) FD研修することで、教員間のコミュニケーションがはかれればいいが。FDのマンネリ化が危惧される。FDをFDしてみても？
- 18) ・コミュニケーションスキルのためのトレーニングは必要か？あるとすればどのようなものか？  
・コミュニケーションが問題とされる根拠は何か＝「異文化交流」という観点に立つということか？
- 19) コミュニケーションについて、系統的に学習したことがないので、基本的な学習法。
- 20) 本当に今の学生はコミュニケーションに問題があるのか？
- 21) ・授業を聞かない学生への対応。  
・学生への指導の仕方工夫されている点について。
- 22) 学部の先生方が来られるので、大学の授業はどのような教育をしているかの情報がほしい。（特に成果を上げている授業の）
- 23) 大学内で行われている講義や実習がどのように行われているのか情報がほしい。

**5. 学生のコミュニケーション能力を身につける、あるいは能力向上のために、普段から教員が示すべき、態度・習慣、指導はどんなものがありますか。**

- 1) 学生のコミュニケーション能力向上には、まず第一に、他を知ることだとおもいます。教員は目線を学生の高さに合わせつつも迎合することなく、学業を通じ、自らの信念や考えを伝えることが大切だと思います。
- 2) 個人にあった指導？よくわからない。
- 3) なるべくこちらから、声をかけて相談しやすい環境を整える。
- 4) 学生に対して先生として接するだけでなく、先輩として接していく必要があると思います。
- 5) 現在の日本でも内向的な者を否定する風潮があるので、そうではなく「人それぞれの個性」を認めることが大切かと考えている。またプロとして自分が担当する業務に真剣に取り組んでいる姿勢を示し続けるべきであると考えている。
- 6) 読書を勧める。
- 7) 学生にへりくだる必要はありませんが、真剣に向き合う態度が必要であると考えます。
- 8) 気軽に挨拶をして、気軽に世間話をする。
- 9) なるべく学生との距離を置かないということでしょうか？
- 10) 学生自身の考えや意見を述べる機会や場を与える。
- 11) ・あいさつ  
・学生と会話する機会を多くする。
- 12) 基本的に自分もコミュニケーション能力に長けているとは思わないので、学生に指導できるとすれば、極力構えない・恐れないうこと、そして尊ぶ心を忘れないことではないでしょうか。
- 13) 学生自身のモチベーションがあがらない限り、コミュニケーションの必要性を学生が感じるようにならない限り、他者は無力なことが多いと思う。
- 14) ・教員自身もコミュニケーションについて検討し、能力を向上出来るように研修を受ける。  
・自分の態度を、学生に対してオープンにしているよう配慮する。  
・双方向を意識した、コミュニケーションを行う。  
・指導の際も、相手の反応を見て、さらに言葉でフィードバックを受ける機会を意図的に設ける。
- 15) 学生自身が考えていく力を身につけていけるように、答えを自ら見出せるような助言・指導。
- 16) 講義その他の場面において、意図的な会話を心がけることが大切でしょう。また、学生との窓口対応にあたる事務職員についても同様のことがいえる。その意味では、FDのみならず、SDについても考える必要がある。
- 17) ・親しみやすさ  
・オープンな雰囲気
- 18) それは研修会で話し合いたい。個人的にはあまり考え過ぎず「いろいろな大人がいる」ことを学生に伝えることも大切だと思うので…。

- 19) 教員が示すべき、態度・習慣、指導はどんなものがありますか。基本的にはロールモデルを示す必要があるが、学生にはもうすこし具体的・わかりやすく・細かく、どのようにするとよいかを説明する必要があるのかなと思う。
- 20) ・しっかりと挨拶をする。(意外にできていないことも…)  
・学生と積極的に関わる。
- 21) 相手の目線に立って話すことが一番大事と思う。
- 22) 学生は、教員側のコミュニケーションをモデリングしているとも言えます。教員が、学生にとってわかりやすい授業をする、わかりやすい話し方をする、ということ意識的に続けていくことが、お互いを尊重し合うコミュニケーションの良いモデルになっていくのではないかと思います。
- 23) コミュニケーション能力は授業でつけさせるものではなく、学生同士の仲間作りの中で培われるものである。仲間を作れない学生に対しては担任がケアするようにする。
- 24) コミュニケーションはケアの本質ととらえる見方がある。そうであるなら、私たちは、学生に対して、根本的な配慮をし、気遣うという姿勢が必要なのではないか?・・・指導できる類のものだろうか?(イロニカルだが、まず教員間の、あるいは教員相互のコミュニケーションが必要である)
- 25) 臨床においては、誠実な患者対応説明と同意に関して、臨床家の「背中を見せる」(とくに大学院臨床教育において必要)
- 26) 教育は、学生の学習支援であり、対人援助の一つと考えると、社会福祉援助技術におけるケースワークにおけるバイステックの7原則に沿った、援助原則がほぼ教育にも当てはまるのでは?
- 27) あたりまえのことだが、対話や発表する機会を増やすこと。そして、かつこよく研究している教員の背中を見せること。
- 28) 相手の話を聞く態度とはどのようなものか、学生に対して普段から見本となるよう心がける。答えをすぐに示さずに、自分でじっくり考えてみるよう指導する。
- 29) まずは、教員間のコミュニケーションが大切だと感じる。学生指導で何か問題に直面したときに、担任の意見だけではなく、その問題に対して、それぞれの方面から考え方を討論することで答えが導きだされることがある。また学生によっては合う、合わないなどの相性の要因も少なからずあるので、サポートする人員がいると、よりよく問題が解決することがあると経験から感じている。また、気をつけている態度としてはあまり感情を表に出さないようにしていることと、学生に対して平等を心がけている。(感情を表に出すことは時には必要だが、あまり出しすぎると、学生にとっては「その日の機嫌」ととられる可能性がある。)
- 30) ・教員間でよくコミュニケーションをとり、雰囲気が良いこと。  
・学生を受け入れる姿勢をみせ、話しかけ、普段の学生の様子を観察し、教員間で共通の情報にしておくこと。  
・自分が気をつけていることは、感情にとらわれずいつも変わらない態度で学生に接すること。

平成20年度北海道医療大学FD合宿参加者ポストアンケート

氏名 \_\_\_\_\_ 連絡先 e-mail \_\_\_\_\_ FAX \_\_\_\_\_

今回のワークショップについて次の項目にお答え願います。

1. コミュニケーション教育について

	理解できなかった	理解できた
意義	—	—
必要性	—	—
方法	—	—

2. 本学において、コミュニケーション教育を全学教育で展開することは必要と考えますか。

・強く必要である    ・必要である。    ・どちらでもない。あまり必要でない。全く必要でない。

5                      4                      3                      2                      1

必要な場合の理由は何ですか。

どのような授業を必要と考えますか。

2. 各担当授業で「コミュニケーション力」を身につける工夫ができますか。

あればその構想、計画をご紹介します。

3. 本学の教育力向上の方策として、どんな方法があると考えますか。

4. 今回のFD研修について

1) 内容の価値    ・きわめて価値あり・価値あり・いくらか価値あり・価値すくない・価値なし

2) 内容の難易度    ・きわめて難しい    ・難しい    ・適当    ・平易    ・平易すぎる

3) 内容の時間配分・多すぎ    ・多い    ・適切    ・少ない    ・少なすぎ

5. 今回のワークショップで良かった点

6. 今回のワークショップでの改善点

7. 今後のFD研修の提案（改善方策もいれて）

8. これからのFD研修でとりあげたい内容

平成20年度北海道医療大学FD合宿研修参加者ポストアンケート：ワークショップ総合評価

1. コミュニケーション教育について

	理解できなかった	どちらでもない	理解できた
意義	2	0	38
必要性	4	1	35
方法	5	4	31

2. 本学において、コミュニケーション教育を全学教育で展開することは必要と考えますか。

強く必要である	7
必要である	22
どちらでもない	7
あまり必要でない	4
全く必要でない	0

①必要な場合の理由は何ですか。 / ②どのような授業を必要と考えますか。

「強く必要である」

1)	①	学部教育（歯科医学教育）をより達成させるため。
	②	講義、ロールプレイ等を組合せる。
2)	①	対人援助の基本だから。
	②	具体的な場面を考えた授業
3)	①	医療現場で必要性を感じているという声を聞いたことより。
	②	グループワーク等薬学部にはないのでやっただけだと思います。
4)	①	いずれの学部でも対人サービスの専門職であるため。また、今後ますます実践力が求められる。
	②	学生参加（主体）型のインパクト&キレのある授業
5)	①	医療人としてあるいはそれ以外の対人援助職に就いていく時に必要なコミュニケーション力、そして、学生生活をスムーズに進めていくために必要な気がします。
	②	ロールプレイを中心とした系統立ったコミュニケーション教育
6)	①	学生-教員相方が医学の学びを深めるため。
	②	「導入」と「実践」が必要

「必要である」

1)	①	医療の現場はチームでの働きを期待しているのだから、個人の力量だけでは限界がある。それを集団の力にするためにはcomが必要だと思う。
	②	記載なし。
2)	①	医療において重要だから。
	②	学生参加型
3)	①	円滑にコミュニケーションをとる必要な機会が多いため。
	②	記載なし。

4)	①	・学生間で不足を感じているから。 ・医療人として必要な能力だから。
	②	グループワーク？
5)	①	対人援助の仕事を目指すには…。
	②	少人数
6)	①	コミュニケーション能力も含めて社会的能力の低い学生が多いため。
	②	記載なし。
7)	①	学生のコミュニケーション能力を高めることが学力の向上や高い志をもつ社会人の育成を促進するから。
	②	専門分野での特殊なコミュニケーション教育
8)	①	他職種について学生時代から知ることが重要であり、知らない人との接し方を学ぶことができる。
	②	記載なし。
9)	①	将来的に患者など人と接する職につくのが明らかなため。
	②	グループでとりくむ学習（能動的な学習）
10)	①	心に問題のある学生が増加していることから。
	②	ロールプレイ
11)	①	専門職として必須なので。
	②	双方向のもの。
12)	①	敬語
	②	演習形式
13)	①	基本基礎と考える。
	②	コミュニケーション論、演習
14)	①	学生の基本的なコミュニケーション能力が低下しており、本学の医療系の専門家を育成するという目標に当たり、トレーニングが必要と考えるため。
	②	講義＋演習（ロールプレイ）形式
15)	①	様々な立場、考え方の人たちが集まりコミュニケーションとる事自体がコミュニケーション教育
	②	講義＋演習（特に様々な領域で話す事＋学科どうし同じ立場としてできる事の2パターン）
16)	①	特に医療系の学校なので、卒業後は必ず通る道の為
	②	コミュニケーションは、単に知識的なことだけでは不足なので、実践を交えて、何度も振り返りような授業をカリキュラムに加える。
17)	①	学習成果が求められている現在、様々な状況から判断して。
	②	本来ならば、クラスサイズを小さくして、意図的な役割付与や参加型とは異なり、できるならゼミ形式のようなものを作るのが望ましい。
18)	①	学生のコミュニケーション力の低下
	②	実践コミュニケーション
19)	①	学生に社会性を身につけるため。
	②	双方向性
20)	①	さあコミュニケーションしてとって全員が全員できないから。
	②	訓練を行えるような授業
21)	①	スチューデントスキルとしてのコミュニケーション能力について、気になる学生が数多く入学しているから。
	②	コミュニケーションスキルアップのための言葉・態度教育を中心とした授業
22)	①	実習前教育
	②	参加型授業＋講義

「どちらでもない」

1)	①	記載なし。
	②	学部により必要なものが異なると思う。
2)	①	記載なし。
	②	コミュニケーション

**3. 各担当授業で「コミュニケーション力」を身につける工夫ができますか。あればその構想、計画をご紹介します。**

- 1) テーマ別グループ学習は可能
- 2) 体験と練習を多く取り入れる。
- 3) 授業中に最後のくくりとして初対面の人と実際に話す機会をつくれれば？
- 4) 工夫をすることができると思います。今もロールプレー、小グループ討議を入れていますが、授業全体のもっと丁寧な設計が必要とわかりました。
- 5) 介護福祉コース指定科目「コミュニケーション論」設計を見直します。
- 6) ひとつの授業では不足だと思います。何度も積み重ねをすることが求められると思うので、どこでということではないと思います。
- 7) 入学→卒業までのプラン化
- 8) 多く話す、多く書く、多く発表する一実践の中での指導
- 9) 地域歯科保健において、その具体的計画を立てさせ、いろいろな人間関係を構築させるのに役立つと考える。
- 10) グループ学習
- 11) 演習とフィードバックを用いる。
- 12) できると考えます。
- 13) カウンセリング・心理検査を教えているため、従来の授業でコミュニケーション能力を育てている。ロールプレーを行い、まず見本を示し、その後学生がペアになり行っている。
- 14) プロセスレコードを用いた他者理解・自己洞察の学習
- 15) 学生だけにコミュニケーション力の向上を望むのは難しいので、まず教員対教員で資質向上が大切であると感じる。(今日のFDのように)
- 16) 以前行ったが、テーマごとにグループワークとその発表を行う。ただ、大人数の場合、形だけに終わりやすい。(表面に出る学生とそうでない学生とが常に現れる etc.) テーマが具体的にみえるものについてはやりやすいー生命倫理など
- 17) 理論系科目では多少難あり。
- 18) 歯学部では病院実習があり、患者さんとキチンとした会話が必要である。
- 19) 実習を担当しているので、どういう操作をして、どんな結果を得られたのかを学生に聞きだすようにする。
- 20) 学生の生きている姿、これらを基本テーマとしてのコミュニケーション授業（文字表現授業）の実施
- 21) できると思うが、学部間等での協力も必要だと思う。
- 22) 学生数が多いため、なかなか難しい。
- 23) 知識伝授が主体となっているので、なかなか難しい。
- 24) 専門のテーマを与えた時のグループ学習により、可能と考えられる。
- 25) (現時点では) 思いつかない。

**4. 本学の教育力向上の方策として、どんな方法があると考えますか。**

- 1) 先ず教員の能力UPが不可欠
- 2) 教員間の連携
- 3) 小グループで授業する。
- 4) 学部・学科ごとのもっと普段の仕事に密着したFD研修
- 5) 学生のできないところ、問題点を改善という発想から離れて、うまくいっているところ、優れている

ところをより伸ばしていく方向での関わりの方が、力が伸びていくのではないかと思います。

- 6) 学部・学系を超えた縦断・横断的ワークショップの関係
- 7) 学部単位ではなく、大学全体で取り組む方がよい。具体的には今は考えられません。
- 8) 補習教育
- 9) ワークショップ、レクチャー会
- 10) 全学的な意識の共通
- 11) 入学試験のレベルを上げる。
- 12) 教員間の教育についての研究会
- 13) 他学部との教員同士の講義内容を知り得ることが学生に対して教育力UPにつながると思う。
- 14) 教員のスキルアップ
- 15) 導入教育の充実
- 16) FD研修 etc 利用
- 17) もう少し小グループ運営できると、演習の実行できる頻度を高められる。
- 18) 他の方法で具体案は、まだ出せないが、これから現場で考えていきたい。
- 19) 医療人育成という目標に特化してもよいと思うので、もっとインテンシブなものを想定したい。  
(例：倫理教育の複数年次開講などー4、5年のわたってやるなど)
- 20) ターゲットをしぼった（より具体的テーマによる）FD
- 21) 従来の知識伝達型の授業も国家試験のためには必要であり、学生参加型とのバランスが必要である。
- 22) 学生から学生自身の心配事、不安などのニーズをどう聞き出すか。
- 23) 成績不振学生を中心とした導入教育の実施
- 24) 学部教員間同士が話し合いをする。
- 25) 教員の数を増やす。
- 26) 学生参加型
- 27) ・学生から実際にうけた問いに答えて、改善していく。  
・教員だけがやっても一方向になってる気がする。
- 28) 専門担当の教員が、教養担当の教員から「学生のレベル」「学生の既習内容」に関する情報を得るシステムの構築。専門担当教員間でも同じシステムを。
- 29) 教員に対する教育
- 30) 教職員の増員
- 31) 教員の duty を減らし、授業の準備、教育にかける時間を増やす。

#### 5. 今回FD研修について

1) 内容の価値	きわめて	あり	いくらか	少ない	なし	無回答
	6	22	10	0	1	1
2) 内容の難易度	きわめて難	難	適当	平易	平易すぎ	無回答
	6	16	13	3	0	2
3) 内容の時間配分	多すぎ	多い	適切	少ない	少なすぎ	無回答
	4	17	11	6	0	2

#### 6. 今回のワークショップで良かった点

- 1) 異なる分野の教育方法を学ぶことが出来た。
- 2) 教員間の交流、FDの重要性が知れた。
- 3) 他学部の先生方の医療や授業のとらえ方が知れたこと。
- 4) ・他学部の先生と一緒に作業ができたこととフランクに話し合えたこと。  
・自分の授業の改善点がみえたこと。
- 5) 講義を「実演」まで持っていった点。ただ、かなり「やっつけ仕事」的な気分も残ります…。

- 6) コミュニケーションを専門としない先生方のアイデア
- 7) ・専門の先生の集団なので、それぞれ考えの違いが見えてよかった。  
・考えさせられることもたくさんありました。
- 8) コミュニケーションという多くの学部に通じた問題について話げできた。
- 9) 他学部の現状が少し知れた。
- 10) 模擬授業
- 11) コミュニケーション教育スキルの方法論を知ることができた。
- 12) 新しい出会いと笑い。
- 13) 人間関係のつくり方
- 14) コミュニケーションについて学ぶことができた。
- 15) 他学部教員の考え方などを知ったこと。
- 16) 他学部教員との交流 (6)
- 17) 教育への意識向上
- 18) コミュニケーションに関する課題から、授業の設計、模擬授業を行なったこと。
- 19) シラバス作成、実行という所まで行い、具体性があつたこと。
- 20) 様々な領域における視点がわかつた。
- 21) 多様な人たち、学部の人たちが集まつた点は、コミュニケーションそのものを扱う上で必要
- 22) 人数配分 (2)
- 23) いろいろな立場の先生方の考え方が聞けたこと。
- 24) ・シミュレーション授業をした点  
・非言語コミュニケーションがおもしろかつた。
- 25) 教員間のコミュニケーションがはかれた。
- 26) ・ホテルだつた。  
・コミュニケーションの専門的な先生がいて良かった。
- 27) ・夜のWSがなかつたこと。  
・テーマが取り組みやすかつた。
- 28) “セルフスピーチモニタリング” という技法を知り、試すことができた。
- 29) FDというものの流れや、内容概略がわかつた。(2)

## 7. 今回のワークショップでの改善点

- 1) 休み時間を少なくして、終了時間を早くする。
- 2) 日常の業務につながる視点
- 3) 缶詰めすぎ。
- 4) もう少し時間を短く (2日目は午前のみとか) してほしい。土・日なので体力的にもきつい。意義はあつたが、次回参加を希望しにくい。
- 5) 懇親会の席でWSの打ち合わせをするのではなく、きちんと分けるともっと良かったと思います。打合せが必要なのであれば、食事後の時間を使うなどの方が夜遅くまで起きていて、おまけに酒席で打合せをするということよりは良いように思いました。
- 6) 実践的授業の導入方法
- 7) ・休日は止めて欲しい  
・宿泊でない方が良く思う。(2)
- 8) これに関する講義を作れと言われても難しい。
- 9) WS 4の30分間の実施は少し長いのでは?
- 10) 時間少ない (WSの)
- 11) コミュニケーションというテーマが広すぎる。もう少し限定した内容が良い。
- 12) 時間配分 (3)
- 13) もう少しゆとりを望みます。
- 14) 目的の明確化。評価は?
- 15) 内容が多すぎるように感じた。
- 16) 同様の試みを続けてみては。

- 17) 教育の指導力向上のものと思っていたため、内容が異なっていた。
- 18) ハードでゆっくり考える暇がなかった。
- 19) いろいろあると思うが、一言では説明できない。
- 20) ・ワークショップV（5）は不要。他のワークショップでも意見交換で十分  
・ワークショップの流れの意図は理解できるが、具体的な展開としては、運用がやや薄い感じがした。  
やるべきところはもっと時間をとるべきでは？（例えばシラバス作成など）
- 21) 2日目は昼までには終了してほしい。最後の意見交換はそれ以前に discussion しているので不要では。
- 22) どういうワークショップにしたいのか目的をはっきり明示するようであればいいと考える。自由に発言できる環境を整えるのは当然だと思います。
- 23) WS 2での作業と、WS 3作業へのつながりの点あいまいな所があった。
- 24) もう少し休憩時間がほしい。
- 25) ・メンバーが前もってわかる方が良い場合もある。  
・使い慣れたPCなども持って来れるようにしてほしい。
- 26) 時間を長くして数を少なく。
- 27) ・映像機器の性能
- 28) 時間配分の関係で少し慌ただしかった。
- 29) 専門分野によりむらが出ることもある。
- 30) 日帰り×2日間で。
- 31) 連休にやらない・土日にやらない・平日に行く・宿泊でやらない・学内で行う。課題が多い。
- 32) ・最後のシミュレーション授業は必要ないのではないか  
・準備時間が足りないため、かなり無理がある

#### 8. 今後のFD研修の提案（改善方策もいれて）

- 1) 参加しやすい周辺に改良する。
- 2) 泊まりにしなくてもいいのでは。2日ばかりならサテライトでいいと思います。
- 3) 実施単位を学科等にして1日研修にしてはどうか。あるいは全学FDと隔年にしても（学科FDと）
- 4) 学部別FDを。
- 5) 年1回40人程度のFDでは、何か変化を起こすにはスピードが遅いのでは。
- 6) FD研修後のフォローアッププログラム
- 7) 泊まりがけでなく、平日にできればよい。
- 8) 学部単位であれば、もっと活発な意見も出るのでは？
- 9) 持続できる研修—宿泊イベントではなく、月毎—数か月毎の研究会
- 10) 宿泊しなくても…。
- 11) 大学で平日に行く
- 12) ・対策と目的の確認  
・テーマを希望をとる前に示してほしい。
- 13) 教育の指導力向上のためのFD
- 14) 今後課題にします。
- 15) 宿泊研修に関しては、今や（！）懐疑的。FDが重要なのは分るが、内容・形態等は皆で討論すべきである。
- 16) ターゲットをしぼった（より具体的テーマによる）FD
- 17) 2日目は昼までには終了してほしい。（2）FD研修が教育改善効果に結びついたのか公開してほしい。
- 18) 参加委員の先生をある一定の範囲にするとよい。
- 19) 一つの課題のみに集中して討議
- 20) 宿泊に意味があるのか？代休といていた方がいいが、休日に行くことに意味があるのか？
- 21) 日帰りの方がより良い。（3）
- 22) 参加者の選出方法からテーマにそって行っては。
- 23) 「絶対来年実行する」カリキュラムを作成するようなFDにする。
- 24) 8月。講義のない時期の平日に。泊まらなくてよい。（お金をかけなくてよい）

- 25) ・連休にやらない・土日にやらない・平日に行く・宿泊でやらない  
・アンケートは無記名にしてはどうですか。
- 27) 希望者のみ参加にするべき

#### 9. これからのFD研修でとりあげたい内容

- 1) 授業（学生）アンケートの改善
- 2) 先生と生徒“みぞ”（考え方の違い・授業の感覚の違い）
- 3) 教員の授業のセルフモニタリング
- 4) 「大学改革」
- 5) グループワーク
- 6) 学生に早期に医療人となる自覚を認識させるためには、どのようなことを行なったらいいか？
- 7) 名物講義の講演と討論会
- 8) 学生の学力向上の方策
- 9) 国試合格率の向上の方策
- 10) 教育の指導力向上のためのFD
- 11) 授業内容や方法の改善だけにとどまるべきなく（最近の中教審のFDについての観点の変更？）  
やはり常に根本的な問題について議論するべきでは？以前の定義（FDの）にあったが、「教授団の能力開発」についてというのは、抽象的ではあったが、問いかけとしては考えるべきものがあった。  
（もっと包括的）
- 12) 「FDで何をとり上げるべきか」を議論する。
- 13) 医療に関する社会的問題（医療難民、後期高齢者保険、組合健保の廃止 etc）
- 14) それぞれの学部固有にあるような問題 etc. 考えるような実習・演習
- 15) 最も求められる全学共通課題をみつけること。つまり、教養教育のあり方
- 16) 全学教育の必要性？
- 17) 国家試験合格率向上の方略
- 18) 教員に対する教員
- 19) 講義のあり方について。近年では、パソコンを用いてのスライド授業が多く行われているが、板書と比べると記憶にどれだけ残るか疑問を感じる。プロジェクターで映しだされる文章、絵などは、学生の印象に残りにくいと考えます。国家試験の合格率に多少なりとも表れているのでは？このような事をとりあげてはどうでしょうか。

# 資 料

## 2. なぜ コミュニケーションか

コアカリキュラム (医学教育)

### 基本的事項

1. 医の原則
  - 1) 医の倫理と生命倫理
  - 2) 患者の権利
  - 3) 医師の責任と裁量
- 4) インフォームドコンセント

一般目標：

将来、患者本位の医療を実践できるように、適切な説明を行った上で主体的な同意を得るために、対話能力と必要な態度、考え方を身につける。

到達目標：

- (1) 定義と必要性を説明できる。
- (2) 患者にとって必要な情報を整理し、分かりやすい言葉で表現できる。
- (3) 説明を行うための適切な時期、場所と機会に配慮できる。
- (4) 説明を受ける患者の心理状態や理解度について配慮できる。
- (5) 患者の質問に適切に答え、拒否的反応にも柔軟に対応できる。

## 2. 医療における安全性への配慮と危機管理

- 1) 安全性の確保
- 2) 危機管理

## 3. コミュニケーションとチーム医療

1) コミュニケーション

一般目標：

医療の現場におけるコミュニケーションの重要性を理解し、信頼関係の確立に役立つ能力を身につける。

到達目標：

- (1) コミュニケーションの方法と技能 (言語的と非言語的) を説明し、コミュニケーションが態度あるいは行動に及ぼす影響を概説できる。
- (2) コミュニケーションを通じて良好な人間関係を築くことができる。

2) 患者と医師の関係

一般目標：

患者と医師の良好な関係を築くために、患者の個別的な背景を理解し、問題点を把握する能力を身につける。

到達目標：

- (1) 患者と家族の精神的・身体的苦痛に十分配慮できる。
- (2) 患者に分かりやすい言葉で対話できる。
- (3) 患者の心理的および社会的背景を把握し、抱える問題点を抽出・整理できる。
- (4) 医療行為が患者と医師の契約的な信頼関係にもとづいていることを説明できる。

## FD・医療系の基本態度・コミュニケーション

### 1. なぜFDか

大学の使命：教育の義務をはたす。具体をすすめる。

変化する教育へ対応するための教員の意識変化と行動の変容

FDの義務化

大学は教育の場：研究COE→教育COE

特色GP (実績) } 教育GP (具体的成果がみえる企画)

現代GP (企画)

大学院設置基準

大学院設置基準

個々の教員による教育 → 組織的教育 大学は教育機関として機能すること  
カリキュラムの実質化

企画：目的・目標を学則などに明示・共有：人材養成目的

学生が修得すべき能力

この実現にむけて、①入学受け入れポリシー

②カリキュラム編成

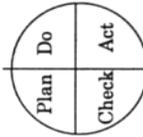
③卒業認定・学位授与

企画の実行

評価 (自己評価・第三者評価)

改善

PDCAサイクル (Plan-Do-Check-Act)



1. Plan (計画)：従来の実績や将来の予測などをもとにして業務計画を作成する。目的・目標

2. Do (実施・実行)：計画に沿って業務を行う。方略：カリキュラム

3. Check (点検・評価)：業務の実施が計画に沿っているかどうかを確認する。評価

4. Act (処置・改善)：実施が計画に沿っていない部分を調べて処置改善

サイクル → 継続的な業務改善

= 仕事の基本 組織と仕事

FD：各教員が大学の使命のなかで立場の理解

大学の改善に寄与することの行動をする 努力する

組織として、すべきことをする

大学の前進は大学人による行動=人の意識変化・行動変化=人物評価 (教員評価)

教育GP 書類

前半 一般的など (上述)

後半 取組

## 3. コミュニケーションに関する授業の例：マナー教育

医療コミュニケーション 平成19年度

講義担当者名： 石川 川崎 小野 阿部  
1年生 前期 1. 5単位

月 15:40-17:00

## 【学習目標】

- 1) 読み書き能力・協同作業能力・自立的学習能力を身につける。(態度・技能)
- 2) 医療人として適切な基本的態度を身につける。(態度)
- 3) 医療者としての広い視点をもつために、チーム医療における言語聴覚士の役割・業務内容を理解する。(知識)
- 4) 大学で学ぶための読み書き能力・協同作業能力・自立的学習能力を具現できる。(技能)
- 5) 医療人として適切な基本的態度の具体を列挙できる。(知識・態度)
- 6) 言語・非言語コミュニケーションについて説明できる。(知識)
- 7) 医療人としての身だしなみを実践できる。(態度)
- 8) 社会的ルールとしての礼節(挨拶、礼、態度)ことば使い・倫理・礼節)実践できる。(態度)
- 9) あたためたい思いやり、敬意、信頼の伝わる傾聴、動作、態度を実践できる。(態度)

- 10) 敬語、謙讓語、丁寧語を適切に使い分けられること。(態度・技能)
- 11) 共同の一員としての役割を適切に果たすために、異職種間での適切な相談、連絡、報告ができる。(態度)

- 1) 2) 電話のかけ方、仕事上の文書の書き方を実践できる。(態度・技能)

## 【講義内容】

回	単元(テーマ)	講義内容および学習課題	担当者
1	A オリエンテーション ヒボクラテスの誓い	授業内容・授業の進行の説明 挨拶 グループ組成 グループ作業(GW)：ヒボクラテスの誓いに含まれる医療人に求められる基本的態度を抽出 宿題「医療人に求められる基本的態度」：ヒボクラテスの誓いに含まれる医療人に求められる基本的態度について、現代の医療の具体を3つあげ説明 レポート宿題	石川 川崎 小野 阿部
2	ビデオ学習	視聴 意見交換 宿題「医療人に求められる基本的態度について 問題の抽出」	石川 川崎 小野 阿部
3	グループ討論	GW：「医療人に求められる基本的態度について 問題を出し合い整理し、目標と関連したテーマの内容を討論」	石川 川崎 小野 阿部
4	全体発表	グループ発表	
5/21	5/21	5/21	
5	講義	言語・非言語コミュニケーションについて(講義)	石川 川崎 小野 阿部

(5) 患者の要望(診察・転医・紹介)への対処の仕方を説明できる。

(6) カウンセリングの重要性を概説できる

## 3) チーム医療

一枚目標:

チーム医療の重要性を理解し、医療従事者との連携を図る能力を身につける。

到達目標:

- (1) 医療チームの構成や各構成員の役割、連携と責任体制について説明し、チームの一員として参加できる。
- (2) 自分の能力の限界を認識し、他の医療従事者に必要に応じて援助を求められることができる。
- (3) 保健、医療、福祉と介護のチーム連携における医師の役割を説明できる。
- (4) 地域の保健、医療、福祉と介護活動とそのネットワークの状況を説明できる。

## 4. 課題探究・解決と論理的思考

- 1) 課題探究・解決能力
- 2) 論理的思考と表現能力
- 3) 生涯学習への準備
- 4) 医療の評価

## 基本事項に関する評価(自己・第三者)

患者とのコミュニケーション(下記より一つを選ぶ)

- 1: 患者の欲求、感情、希望に対し配慮に欠けていた。
- 2: 患者の欲求、感情、希望に対し配慮に欠けることが時があった。
- 3: 患者の欲求、感情、希望に対しおおむね配慮できていた。
- 4: 患者の欲求、感情、希望に配慮した行動を常にとることができた。
- 5: 患者の欲求、感情、希望に配慮した行動をとり、患者と打ち解けるのにずば抜けていた。

医療チームの他のメンバーとの関係、協調性(下記より一つを選ぶ)

- 1: 協調性に重大な欠陥があり、診療チームのメンバーとして当てにならない。
- 2: 時に対人関係でつまづき、診療チームのメンバーとして不十分であった。
- 3: 協調性があり、指導に関わる医師の指示に反応して行動できた。
- 4: 良好な人間関係を築き、診療チームのメンバーとして行動できた。
- 5: あらゆる面において完全に、診療チームのメンバーとして有能であった。

6	講義	身だしなみ、礼節（挨拶、礼、態度）ことば使い・倫理・礼節）・あなたがかいいいやり、敬意、信頼の伝わる傾聴、動作、態度・敬語、謙讓語、丁寧語・異業種間 相談、連絡、報告、電話のかけ方・仕事上の文書の書き方	石川 川崎 小野 阿部
6/4			
7	ロールプレー	接遇について <u>ロールプレー</u> (R.P.)	石川 川崎 小野 阿部
6/25	ロールプレー	身だしなみ 第一印象 挨拶、お辞儀、自己紹介、アイコンタクト、表情 笑顔	石川 川崎 小野 阿部
8	ロールプレー	傾聴 あいづち おおむがえし 座り方 動作 歩き方	石川 川崎 小野 阿部
7/6		R.P.	
9	ロールプレー	敬語、謙讓語、丁寧語・ <u>R.P.</u>	石川 川崎 小野 阿部
10	ロールプレー	来客 案内 患者とのやりとり <u>R.P.</u>	石川 川崎 小野 阿部
7/9			
11	ロールプレー	命令の受け方 用件 相談—連絡—報告 電話 <u>R.P.</u>	石川 川崎 小野 阿部
12	演習	仕事上の文書 <u>練習</u>	石川 川崎 小野 阿部
7/23			
13	まとめ	まとめの全体討論 <u>討論</u>	石川 川崎 小野 阿部
14	まとめ	宿題	石川 川崎 小野 阿部
7/30			

【評価方法】 普段の態度（授業外も含む）・遅刻 授業態度などを考慮した 態度・挨拶・礼儀

- +ロールプレー 30%
- 協調性 20%
- レポート 20%
- ポートフォリオ 30%

レポート

自己表現がなされていること

ポートフォリオ

A: 授業資料・レジメ、B 自己の学習ノート・資料・まとめに分けて整理

授業資料・レジメなどが順序よく整理されていること

普段の学習ノート、収集資料などが整理されていること

随所でまとめの整理をしたノートがあること

日常的に学習していることの証拠、整理状況、わかりやすさ、思考の豊かさ、思考力、資質、独自性等を評価

【備考】

教科書・出版社：大島昭子 「医療接遇 実践マニュアル」 クリニックマガジン

その他：白衣を用意する。

コミュニケーション communication

送り手が発信した情報を受け手が理解してコミュニケーションが成立

- 1) 送り手の発信した情報の受け入れ
- 2) 送り手は 受け手へ 情報伝達
- 3) 受け手は 送り手の発信した情報を受け入れ
- 4) 受け手は 送り手の発信した情報を理解 (コミュニケーションの成立)

メッセージ → 入力信号 → 受信信号 → 受診メッセージ  
情報源 → 信号化 encode → チャネル → 解読化 decode → 受容：理解

理解のためには 信号化 解読化 に ルールの共有

例えば知識=命題知識 propositional

文脈 context=手がかり知識 cue information : 状況

スキーマ schema=構造化された知識 : 構造

メンタルモデル mental model = 受け手の心の動き (脳で考えること)  
= 理解へ結びつく (わかる課程)

同化 assimilation = わかったということ

調節 accommodation = 考えを修正

対人コミュニケーション

言語コミュニケーション 35%

非言語コミュニケーション 65%

言語コミュニケーション verbal communication

意味的知識 semantic knowledge

統語論的知識 syntactic knowledge 文法

語用論的知識 pragmatic knowledge 文脈状の意味

医療の現場

患者・障害者・家族

言葉づかい 美しい ことば

敬語： 敬意から

尊敬語

謙讓語

丁寧語

話し方 感じの良い話しかた 挨拶

報告 連絡 相談 (ホウレンソウ)

情報収集 開かれた質問 閉じられた質問

非言語コミュニケーション nonverbal communication

対面コミュニケーション

メッセージ全体の印象 = 言語的内容 7% + 音声 38% + 表情 55%

対面コミュニケーションは 90%以上を非言語に依存

(Mehrabian 1968)

パラ言語 paralanguage

話しの内容以外の側面：声の大きさ 抑揚 調子 沈黙 言い間違い 発話量

外見：社会的認知 social cognition

その人物はどのような人物か 社会的情報から判断

錯誤相関

バイアス bias

メッセージ

気遣い

協調

責任

明朗

積極性 理解 判断 リーダーシップ

1) 表情 (1) 幸福、(2) 悲しみ、(3) 怒り、(4) 嫌悪、(5) 驚き、(6) 恐怖

2) 視線 eye contact (1) 情報探索 相手の反応のフィードバックを得る

(2) チャネル開放 相手に開く

(3) 隠蔽 みてほしくない、露出 みてほしい

(4) 社会的関係の確立 たとえば相手より優位にたつ

(5) 親和

アイコンタクトの量の調節

物理的距離

話題の親密さ

微笑

凝視 gaze の役割 (1) 親交

(2) 戦い

3) 身体動作 gesture

種類 (1) 表象 emblem

(2) 例示子 illustration 指示など

(3) 感情表出 うれいしいとき、かなしいときの動作

(4) 調整子 regulator うなずき

(5) 適応子 adaptor 頭をかく 防衛反応

4) 服装 clothing

態度 身だしなみ 万人に清潔感をあたえる

美しい態度・動作 きびきび 端正

歩き方、立ち方、座り方

お辞儀

笑顔

美しい表情

信頼関係の構築

共感 共感の傾聴

きく 共感 はなす

解釈 謙虚 なたたかい思いやり

対人距離 interpersonal distance

コミュニケーションにおいて距離は重要

(1) 密接距離 intimate distance 身体が接するほどの距離 15-45cm

(2) 個人距離 personal distance 45-75 75-120cm

(3) 社会距離 social distance 公的距離 120-210 210-360 cm

(4) 公衆距離 public distance 演説 講演 360-750 750 cm

傾聴入門

相手を理解する 理解していると思わせる 信頼感を得る

非指示的カウンセリング

- ・クライエントの問題を正しく診断し解決する力をもっているのは実はクライエント自身である。
- ・クライエントを尊重し、クライエントがより建設的な自己表現をめざすことができるように援助する。

無条件の肯定的配慮

共感的理解 (診断的理解) 解釈的理解 (評価的理解) (指示的理解) (同情的理解) ではなく

プロセス

信頼関係の築き→問題や課題の探求→気づきと自己理解→実際の肯定的建設的な行動

共感的傾聴

大きく耳を傾け、心を聴く

相手の気持ちに寄り添う

相手のことばの背後にある気持ちと考え方が

おのずと自分の心に響いてくる 伝わってくるまで聴く

無条件の受容的配慮と共感的理解に支えられた傾聴

真実に傾聴するために必要な枠組み

時間 できることとできないこと ゴールは

共感的な傾聴態度

視線 アイコンタクト 強い 鼻の頭 むなもと

座る位置：視線と関係 正面に座ることよりも斜め横に座る

相手に与える緊張や威圧感が軽くなる

距離

相手の沈黙 尊重

共感的寄り添い

相手が語るままについてゆく おおむがえし → いいかえ

感情への反射 (相手の感情を確認する)

→ 感情の確定(相手の感情をくみとる)

謙虚



**【学習内容】**

目標を達成するために、順に授業をすすめます。これは学生の学習計画でもありますので、各回の授業内容を具体的に表現します。目標達成のために多様な授業法を駆使します。授業方法もわかるようにします。宿題、中間試験も表現します。中間試験（形成評価）もおこない、互いのフィードバック（授業の仕方、学生の学習の仕方途中把握）も重要です。以下の枠に表現してください。

回	テーマ	授業内容および学習課題	担当者
1	オリエンテーション	授業の目標と全体の流れを把握する。	河合太郎 神重一郎
2			
3			
4			
5			
6			
7			
8			
9			
10			
11			
12			
13			
14			
15			

**【評価方法】**

評価の方法を書き、それぞれの割合を書きます。  
たとえば、レポート20%・学習態度10%・中間試験30%・定期試験40%  
さらに具体的なことを書いてもよい。

**【備考】**

教科書  
参考書  
その他



[表現力を育てる]

## 演劇活動を取り入れた コミュニケーション教育

長谷川聡\*

### 伝統的講義から体験的講義へ

若者の表現力不足や自己中心的なコミュニケーション態度が取りざたされ、彼らのスキル低下が接客応対や職場内のコミュニケーションなど職場問題の一因となり、あるいはニートや早期離職の増大につながるという社会問題視されている。若者だけの問題とは思わないが、ある部分では合意できるところがある。

筆者は所属学部でコミュニケーション関連科目を担当し、以前は「教科書を用いた伝統的講義」形式で授業を行っていた。あるとき、学生たちの状況がたいへんなところまできていることを痛感した。「講義で聞いた話を実感できない」「未体験のことを十分に想像できない」「理論が現実と結びつけられない」ことが対話や成績に顕在化してきたのである。そこで、過去に言語療法士として医療現場で行っていたグループワークの手法と自らの演劇経験とをもとにシラバスを一新した。

それが演劇的活動を取り入れた体験的講義である。それは理科実験的に構成されたアクティビティにより様々なコミュニケーション場面を教室内で再現し、学生たちに「学問を身をもって体験する」「理論や用語に実感をもって接する」「自ら現実と理論を一致させる」ことである。

\* 北海道医科大学看護福祉学部・助教

### 演劇とコミュニケーション 教育の関係性と価値

#### 1. 演劇から学ぶもの

演劇はコミュニケーションの芸術であり、人の関係性の芸術である。演劇から学ぶことは人の関係性とその表現についてである。人間関係の真実やその実践的価値を学ぶことでもある。私たちが看護・福祉臨床の文脈で用いる「コミュニケーション」とは人と人のかかわり、すなわち人の関係性そのものである。人とのかわりそのものを仕事にしている私たちが演劇から学ぶものは多い。演じる体験は人の関係性と役割について重要な示唆を与えてくれる。またセルフ・モニタリングやセルフ・コントロールの訓練にもなり、人と対する時の心と身体と表現の技術習得にもなる。

演劇を構成劇と即興劇に分類することがある。構成劇にはシナリオがあり、即興劇にはそれが無い。筆者は即興劇と即興劇俳優のためのトレーニング法をもとに教育プログラムを実施しているの、ここでこの話題を即興劇に絞ることにする。

#### 2. 即興劇の応用

即興劇の魅力的で円滑な進行には「きっかけづくり・受容・反応」の3つが必要であり、それが即興俳優訓練のポイントでもある。きっかけづくりは、俳優が「今ここが、ほかの誰でもない自分の番である」と感じるとき、「今ここ」で感じている何かを表現することである。その表現はことば（台詞）かもしれないし、動作（所作）かもしれない。その両方であるかもしれない。次の俳優はそのきっかけが予想どおりであるかと否にかかわらず、その表現を「肯定的に受容する」。同時に「何かを付け加えて応じる」ことで芝居は進行する。最後に「付け加え」たことが次の受容と反応のきっかけになって物語が進行する。これが即興劇の成立原理である。

#### 3. 即興劇で学ぶコミュニケーション実践

私たちの日常コミュニケーションはまさに即興劇である。人に会う。予定している場合も偶然の場合もある。そこでやり取りが始まる。やり取りは一瞬にして終わることもあれば長く続くこともある。予想どおりの展開になることもあればそうでないこともある。以前からの関係性のうえに今のやり取りがあり、今のやり取りが今後の関係性につながっていく。やり取りは言葉だけでなく、互いの存在・立ち居振る舞い・視線・表情・服装、そしてその場面と状況も含めた「今ここ」という、相互に知覚され認知できる要素の全体である。日常コミュニケーションとは筋骨きのない「今ここ」で生じる人と人の関係である。その緊張感とダイナミクスと人の関係が即興劇であり、だから私たちはその芸術表現が即興劇であり、だから私たちはそれを日常コミュニケーションと人間関係そのものだと感じるのである。

「今ここ」を表現する即興劇という芸術があ

り、それを行う役者は訓練を受けて舞台に立つ。そこに「すてきなアクト」を生む訓練法が存在する。私たちの日常コミュニケーションもすてきな即興劇のようでありたい。だったらその訓練法を試してみようではないか。予定どおりにならない即興劇の訓練とは、どのような場面・状況になっても怒ることなく、待たされたままコミュニケーションを行えるようにするための訓練である。その方法論をコミュニケーション教育に生かさない手はない。

### 看護・福祉分野で行う意味

#### 1. 医療従事者の対人能力

別の表現をすれば、即興俳優が行う訓練は「台本のない芝居に身を委ねる」訓練であり、そのための感情と身体と言語のセルフ・コントロールの訓練である。それは看護・福祉臨床家にも必要な基本的コミュニケーション能力である。

生まれながらという表現は適切でないとしても、小さい頃からそれをうまく身につけた者は訓練なしに自然にできる。しかしそのような学生ばかりが看護や福祉の養成校に志願し、そのため試験を合格し入学してくるわけでは無い。また看護・福祉実践の養成校となるすべての人が高度なコミュニケーション・スキルを有するわけでもない。むしろ私たちの職業は相手のコミュニケーション・スキルに期待できないし、あまりすべきではない。場合により特殊なスキルが医療者側に要求されることもある。養成課程でも現任研修でも、この道を志す誰もが確実に即興劇的な臨機応変の対人能力を身につけなければならぬのである。

#### 2. 演劇的活動の位置づけ

看護・福祉教育における演劇的活動の位置づ

表1 コミュニケーション障害論/コミュニケーション実践論のシラバス (部分)

回	単元	内容
	オリエンテーション	対人コミュニケーションとは何か 障害のある人とのコミュニケーション 授業の進め方と受講上の留意点
1		
2	一般コミュニケーションスキル	ゲーム/アクティビティの実践と留意点
3		コミュニケーションスキルとしての強項と解放 —非言語的コミュニケーション— —不要な緊張を除いて受容的雰囲気をつくる
4		感覚の感通と鋭敏化 —言語以外で伝わるものに気づく
5		場面と状況の理解と判断
6		安心と信頼—積極的な聴き手の態度
7	一般コミュニケーションスキル	積極的に聴く—話を引き出す
8		オフアードする—話のきっかりと流れをつくる
9		明確に伝える—わかりやすい指示を
10	特殊コミュニケーション	指文字 基本手話単語と簡単な会話体験
11		身体的文法と表現力中心の手話体験
12		空間的文法を取り入れた手話体験
13	特殊コミュニケーション	透明文字盤の制作と自己評価
14		透明文字盤の使用法チェック 全体のまとめと振り返り

けは2つ考えられる。1つはコミュニケーション・アートとしての演劇が蓄積してきた訓練法を専門的・基礎的コミュニケーション教育に生かすこと。もう1つはロールプレイングや模擬患者コミュニケーション演習、カウセンシングや面接相談技術の前提訓練として、あるいはそれらの専門教育の導入部として取り入れることである。こちらは演劇的にも、より専門的で高度な技術と指導力が教育において要求されることになる。

### 演劇活動を取り入れた授業の実例

#### 1. シラバスの実例

演劇活動を取り入れたコミュニケーションスキル教育は、看護福祉学部看護学科・臨床福祉学科2年前期の共通選択科目「コミュニケーション障害論」で、心理学部臨床心理学科1年後期の選択科目「コミュニケーション実践論」において、両科目ともに同じシラバスで実施している(表1)。毎年受講者数は看護福祉学部で20~30名程度、心理学部で40~50名程度

ンが目的であることを強く動機づけ記憶させる。

シラバスの前半「一般コミュニケーションスキル」の単元が、ここまでに触れた即興演劇訓練を取り入れたコミュニケーションスキル教育に相当する。ここで「一般」とは日常私たちが使う言語的・非言語的コミュニケーションを指し、母音言語以外のコミュニケーション手段や代用的コミュニケーション手段を用いたコミュニケーション法を「特殊」と呼んで独自に区別している。

シラバスには「演劇」や「即興」という用語をあえて用いていない。芝居好きな学生や教師だけの関心を惹く状況は避けたいからである。また多くの人がイメージするのは構成劇であり、即興劇というだけで不要な緊張を引き出しかねない。学生には「手話や文字盤を使った特殊なコミュニケーション技術の前の医療・福祉の専門家として誰とでもどんな場面状況においても良い対話者になれるような一般的なコミュニケーション学習である」と説明している。

#### 2. 授業展開

毎回の授業はオリジナル物のほかに、筆者が体験し参加した演劇活動やワークショップで学んだアクティビティ、Spolin<sup>1)</sup>のシアターゲームや相川<sup>2)</sup>ら多数の演劇関連文献に記述されたアクティビティを参考にしている。それらをデータベース化したものの中からテーマや出席人数、出席者の志向や身体能力・集中力などに配慮して準備し、時間内に可能な2つ3つを実施している。

開講直後は、いかにも演劇的なアクティビティは避け、小中学校のレクリエーションで体験したようなゲームあるいは運動能力や知的能力をあまり必要としないゲームから始める。「競争」よりも「協力による成功」が得られるアクティビティを優先的にを行い、コミュニケーション

各活動の後には必ず振り返りの時間を取り、学生間で話し合わせる。さらにその一部または全部を「今日の授業で学んだこと」と題した小レポートにして毎回提出させ、筆者がそのすべてにコメントを入れ翌週の講義時までに返却している。

即興劇的訓練は「ちょっととした遊び」感覚の導人から次第に「芝居らしい」発展訓練へと導き、「役を意識し演じるなかで今ここ」にある関係性に反応することができるようになる。たところで、入門手話による会話練習と透明文字盤の制作とそれを用いたロールプレイング体験学習へと展開していく。

### 学生たちの反応・成果

#### 1. 学生の反応

統計的な学習効果判定やアンケート集計として列挙することはこの授業と本論の趣旨にそぐわない。一つのアクティビティを取り上げ、授業の録音記録と当日の小レポートに記載された学生の反応を表に例示する。

例示した「誕生日順に並び替わる」ゲーム(表2)は初回の最初によく行う。ゲームのねらいは「誰にでも気楽に話しかけ、話しかけられたら快く反応して情報交換し、協力して並び順を替える」ことである。特殊な能力や経験を必要とせず個人の身体的・知的能力にも関係なく、全員がリラックスして参加できる。仲良し小グループが崩れ、全体が賑やかなムードになって短時間で並び終わればゲームは成功である。テーマは誕生日のほかに、学校から実家までの距離の近い順、任意の数字を頭のなかに浮かべてその大小順で並び替わるなどで、これらを数回繰り返す。



## 「ボランティアを育てるコミュニケーションスキル」

長谷川聡（北海道医療大学看護福祉学部助教授）

市民活動やボランティア関連団体の支援と参加、あるいは招かれた講演のために北海道を走り回っています。何う先の分野領域は問いません。それは私の専門がコミュニケーション学と情報学で、中心テーマが「対人コミュニケーションとその障害」だからです。人が人とどう付き合うか、人が集団を作ってうまくやってくにはどうしたら良いかということを目ざして、社会実践活動を通じて研究し教育する仕事です。何う先の分野領域を問わないのはどの活動にも、どこのグループにも人と人のコミュニケーションの問題や不具合があるからです。そしてそこにいる誰もが「みんなとうまくやっていたいと願っているからです。

何う先の皆さんとそのグループ以外のコミュニケーション問題を話してみると、多くの人たちが表現力の問題と考えていることに気づかれます。そして自らに自信があると他の人の理解力を問題にし、自省的だと自らの話し方や文章の書き方の拙さを口にします。しかしコミュニケーション学のほうからみるとここに大きな勘違いが二つあります。一つは表現ではなく傾聴のスキルが大切であること。二つは言語

というのは表情・視線・声・身振り・動作や服装・距離等々、言語以外でメッセージを伝えるもの総称です。私たちは日頃から言語だけでなく、言語と同時に非言語でも意志や感情を伝え合っています。そして「伝えようと思っただけで伝えている」言語の内容を、「伝えようと思っていないのに伝わってしまう」非言語が、時に言語メッセージを意のまま効果的に、またある時は意に反して逆効果的に伝えているのです。これに気づきこれを自然と効果的に使えるようになると、でもコミュニケーション力が豊かになります。簡単に言うと「(言語で)何を言うか」だけでなく、それを「(非言語で)どのように言うか」にまで気を配ることができると良いということです。難しになりました。わかりやすくまとめます。コミュニケーション屋の目から見て市民活動やボランティア活動に大切なのはこの3つ：「やる気」「笑顔」「普通の人」。やる気とはもちろん活動に対する情熱のこと。しかし恐い顔をしていては人が集まらない。心の奥底に情熱を持ちつつも、見た目には穏やかな笑顔を湛えている(非言語)こと。そして人と接するには肩書き・地位・立場をひけらかさず隣人友人として普通に話ができる相手(傾聴)になる。実際、そのようなリーダーとスタッフのいる団体には大勢の人たちがひびきりなしに出入りしているようです。

## プロフィール

長谷川聡（はせがわさとし）

北海道医療大学看護福祉学部助教授で専門はコミュニケーション学・福祉情報学です。現在の研究テーマは「文化と福祉の市民活動」。市民ボランティア団体の実践活動に自ら参加しながら、文化活動を通じた地域のコミュニケーションとノーミライゼーションを研究しています。これまでに、「飛んでけ!車いす」の会、健康生きがいづくりアドバイザー北海道協議会、演劇でまちづくり八軒(札幌)、楽しみアート(岩見沢)、地域まちづくりネットワーク(千歳)、ウォーキングで健康づくり(札幌)など各地の活動を支援しているほか、札幌市生涯学習振興財団さっぽろ市民カレッジ企画委員をつとめています。著書に「みんなで作るステージ〜練習の前に」(赤い実企画・共著)、「コミュニケーション演劇〜ワークショップのすすめ方」(北海道演劇財団・共著)等。





研修会場到着後に笑顔で記念撮影「実りある研修にしましょう」



開会にあたり・・・



「アイスブレイキング」



グループでの討論開始



グループワーク：こちらは楽しい雰囲気



グループワーク：KJ法を用いて・・・



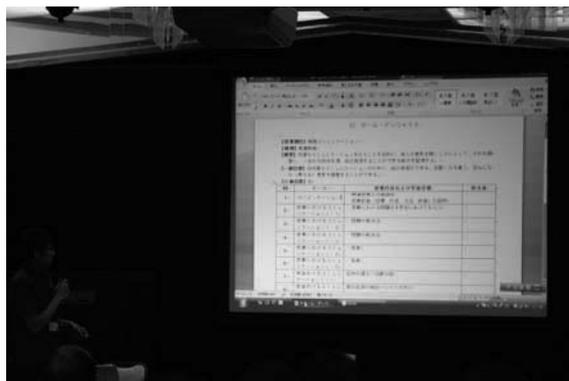
発表：学生生活「学生-学生、学生-教員という形で感じている課題について」



発表：「コミュニケーションをめぐる課題」  
討論した結果は・・・



WS 4 : シラバスを作成しよう



発表 : 実習におけるコミュニケーション



懇談会 : 教員同士のコミュニケーションを・・・



今日は、シミュレーション授業を行いましょう。



発表 : 「コミュニケーションのための言葉・態度のトレーニング」と題して・・・



WS 4 : ロールプレイ「実習におけるコミュニケーション」



発表：「各状況設定に合わせた聞き取りと書き方」のロールプレイを・・・



WS 5 : 教育改革についての意見交換



活発な意見交換会になりました。

発行 平成21年2月

**北海道医療大学FD委員会**

委員長：阿部和厚

委員：関崎春雄・齊藤浩司・平藤雅彦・有末 眞・東城庸介・中澤 太・井出 訓  
小澤次郎・横山登志子・土肥聡明・及川恒之・長田真美・国永史朗・花渕馨也  
飛岡範至・水野 誠・嵯峨由紀美（事務局）

〒061-0293 北海道石狩郡当別町金沢1757

Phone:0133-23-1211（代） Fax: :0133-23-1669



北海道医療大学

Health Sciences University of Hokkaido

---

〒061-0293 北海道石狩郡当別町金沢1757

TEL : 0133-23-1211 (代表)

ホームページ : <http://www.hoku-iryu-u.ac.jp/>